

41864

教科書文庫

4
815
41-1930
20000 48273

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

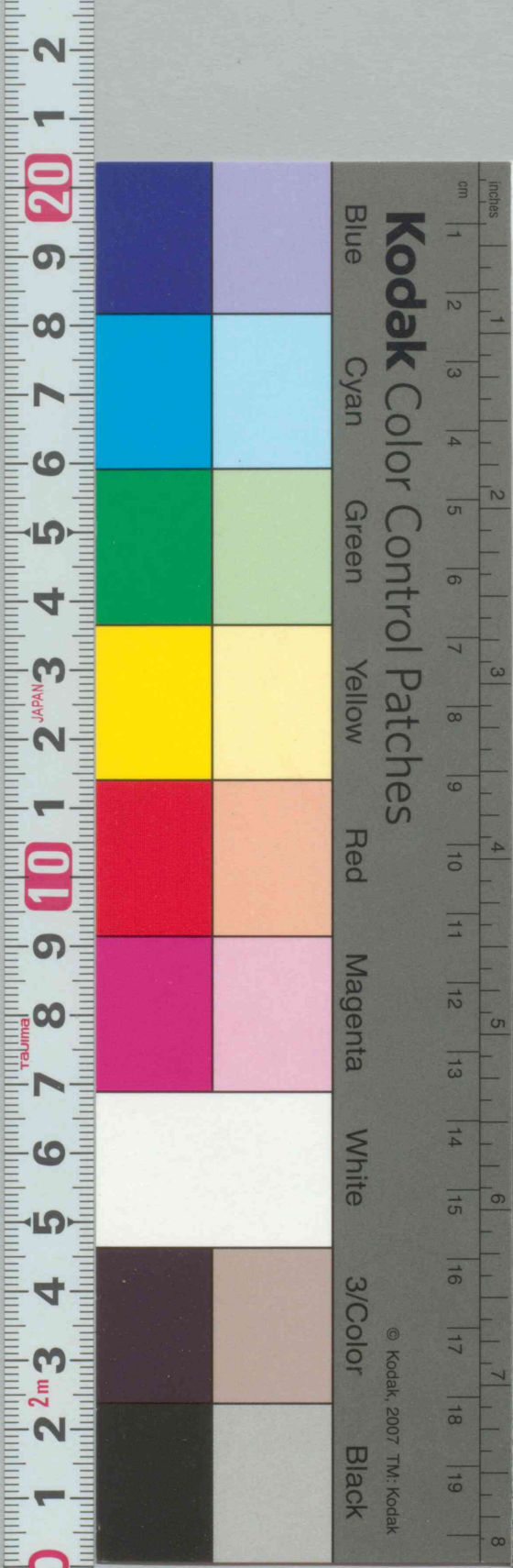


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



375.9  
Y019  
資料室

行五  
中等新國文典  
全

文學博士 吉澤義則 著

教  
41  
200



資料室

教科書文庫
4
815
41-1930
2000048273

375.9  
Y019

第五  
中等  
新國文典



昭和五年一月  
十四日檢定済

全

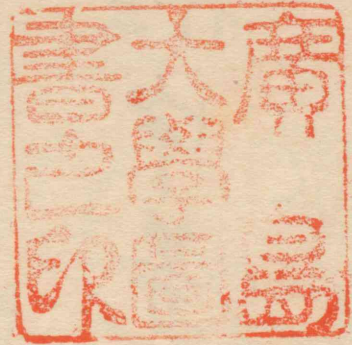
広島大学図書

2000048273



籙  
尾  
花  
玄

籙筆の其と人大木籙



明治初期即ち大槻文彦博士の廣日本文典<sup>ニ</sup>出るまでに著ばされた日本文典は、多少も言語四種論の影響を受けてゐる。言語四種論は鈴木<sup>アキヲ</sup>大人の著書で、文政七年刊行せられ、國語を、体の詞<sup>テニチハ</sup>、形状の詞、作用の詞の四品詞に別けて説いてある。國語を數品詞に別けて觀ることは、大人以前にも無いではないが、明治時代の日本文典に交渉の深い點に於て、特にその著者大人を日本文典の開發者と仰ぎ、肖像と筆跡とを卷頭に掲げることにした。  
大人は通稱菅助、字叔清、號を離屋<sup>ハナヤ</sup>といつた。本居宣長翁に師事し、尾張の藩學明倫堂の國學の教授となつた人である。明和元年三月三日尾張國琵琶島に生れ、天保八年六月六日七十四歳で逝去せられた。言語四種論の外和漢の著書が澤山にあつて、その數數十種に上つてゐる。

## 例言

- 一 本書は中學校及び之と同程度の中等學校に於ける文法教科書に充てんが爲、その教授要目に準據して編纂せるものなり。
- 一 本書は成るべく煩瑣なる理論を避け、極めて平易簡明なる説明を與へ、生徒をして容易に日本文法の一般的智識を了得せしめ、讀書に作文に直に之を應用せしめん事に力を用ひたり。
- 一 近年、文の組織を説きつゝ、品詞の意義用法を述ぶること行はる。然れども始めて文法を學ぶ者にとりては、猶品詞より入りて文に及ぶ方、理解し易く、且つ適當なりと思惟し、本書はその順序に従ひたり。
- 一 本書の編纂に當り、助動詞の意義用法、動詞と助動詞及び助動詞相互の接續助詞の意義用法等、學生の誤り易きものの説明には特に

意を用ひたり。  
 一 文例は成るべく生徒の實生活に緊密なるものを選び、作文及び讀本との聯絡に注意せり。

大正十二年九月

著者識す

五訂に當りて

一 主として練習問題の一層自然にして適切に、しかも文學的趣味の豊なるものを選び、且つ其の數を増加して以て所期の目的を達せんことを努めたり。

昭和四年八月

著者識す

五訂 中等新國文典 目次

單語篇 (上)

第一章	單語	一
第二章	名詞	二
第三章	數詞	四
第四章	代名詞	六
第五章	動詞	一〇
第六章	形容詞	一一
第七章	副詞	一三
第八章	接續詞	一六

第九章	感動詞	一八
第十章	助動詞	一九
第十一章	助詞	三

單語篇 (下)

第一章	動詞の活用	三五
一	四段活用	三五
二	上二段活用	三七
三	上一段活用	三七
四	下二段活用	三六
五	下一段活用	三六
六	カ行變格活用	三九
七	サ行變格活用	四〇
八	ナ行變格活用	三

九	ラ行變格活用	三
〇	動詞活用の識別法	三
第二章	動詞の活用形	三
第三章	口語の動詞	三
第四章	形容詞の活用	四
第五章	音便	三
第六章	助動詞の種類及活用	五
一	受身の助動詞	五
二	可能の助動詞	六
三	使役の助動詞	六
四	崇敬の助動詞	六
五	時の助動詞	七
六	推量の助動詞	七

七	打消の助動詞	三
八	指定の助動詞	三
九	咏嘆の助動詞	三
一〇	比況の助動詞	三
二	希望の助動詞	七
第七章	助動詞と動詞との接續	七
第八章	助動詞相互の接續	七
第九章	助詞の用法	九
一	ぞ・なんこそ	九
二	やか	九
三	ば・ともども	九
四	と	一〇
五	だに・すらさへ	一〇
六	な・な	一〇

七	ばや・なむ	一〇
八	に・へ	一〇
九	がにを	一〇
一〇	てで	一〇
第十章	接頭語・接尾語	一〇
第十一章	品詞の轉成	一〇

文章篇

第一章	文の成分	二四
第二章	文の成分の位置と省略	二四
第三章	句及び節	二七
第四章	文の構造上の種類	三三
第五章	文の性質上の種類	三三

附録 文法上許容ニ關スル事項

表

- 第一表 〔文語動詞活用表〕  
〔口語動詞活用表〕
- 第二表 〔文語形容詞活用表〕  
〔口語形容詞活用表〕
- 第三表 文語助動詞活用表
- 第四表 口語助動詞活用表
- 第五表 動詞助動詞接續法
- 第六表 接續助詞と動詞形容詞との接續法

目次終



訂五 中等新國文典

文學博士 吉澤義則 著

單語編(上)

第一章 單語

一 大君の惠の露はあまねく民草を露せり。

二 燈火の影は水に映りて星の如く花の如し。

右の例に於て、傍線を施せる一つ一つの語は、皆それごとく或意味を表す。かくの如く或意味を表す言語の單位を單語といふ。而してこれ等の例の如く、いくつかの單語が集りて纏りたる思



文章  
も単  
い文  
ふと

想を表したるものを文章といふ。  
單語をその意味・職能形態の上より、之を左の十種に分つ。而してその各を品詞といふ。

- 名詞 數詞 代名詞 動詞 形容詞 副詞 接續詞
- 感動詞 助動詞 助詞

### 第二章 名詞

- 一 重盛は平家の柱石たり。
  - 二 山には將軍を祭れる神社あり。
  - 三 瓢箪から駒が出る。(口)
  - 四 儉約は美德である。(口)
- 右の例にて、傍線を施せる語は皆事物の名をあらはせり。かゝ

名詞

#### 練習一

る語を名詞といふ。

#### 練習

一次の文中の名詞を指摘せよ。

- (イ) 黄金の鎌のやうな弦月が高く鋭く光を放つてゐる。
- (ロ) 林檎は北海の産を最上とす。齒にさはれば形消えて、すゞやかなる風味ばかり口の中に残りたる、仙人の薬にも似たらんか。
- (ハ) 春來れば雪消の澤に袖垂れてまだうら若き若菜をぞ摘む。
- (ニ) 枯草のひまに生ひたる初若菜摘みて捧げん神のみ前に。
- (ホ) 東郷大將は明治三十七八年戦役に偉勳を立てしにより、人呼んで東洋のネルソンと稱す。
- (ヘ) 廉潔質素克己忍耐の氣性を鍛錬せねばならぬ。
- (ト) 千里の馬も老いては駄馬に劣る。

二、名詞の定義を下せ。

第三章 數詞

數詞

- 一 |を聞いて十を知る。
- 二 一寸の蟲にも五分の魂。
- 三 鉛筆一ダースの價五拾錢なり。
- 四 太郎は三の組の第二番である。(口)
- 五 六七合目以上は、空氣が稀薄であるから、人の呼吸數は、下界の二倍となる。(口)

右の例にて一・十・一寸五分一ダース五拾錢二倍は事物の數量をあらはし、三の組第二番六七合目は物の順序をあらはせり。かくの如く事物の數量又は順序をあらはす語を數詞といふ。

練習二

練習

一、次の文中の數詞を指摘せよ。

- (イ) あの角から三軒目が僕の家です。
  - (ロ) 十で神童、十五で才子、二十過ぎてはたゞの人。
  - (ハ) 石は評判通りに大きい。一つで五間も十間もあらう。仰山なもんぢや。この石一つ運ぶに、とても千人や千五百人の力では運べるものでない。
  - (ニ) 五月の初は立夏にて、もはや夏の季節なり。蛙の聲もやうやく聞ゆ。五月の二日又は三日を八十八夜といふ。立春より數へて八十八日目に當るの意なり。
  - (ホ) こゝに書物五卷と手帳三冊と半紙が二帖あります。
  - (ヘ) 太刀一ふり、長刀二えだ、槍三すぢ、旗四ながれのふり、えだすぢながれ等を助數詞といふ。
  - (ト) 孔子門人三千人、其の最も勝れたるもの、顔淵曾參有若等七十二人なりき。
- 二、數詞の定義を下せ。

### 第四章 代名詞

#### 代名詞

#### 人代名詞

- 一 予は昨日かれを病院に見舞ひき。
- 二 こはわれの知る所にあらず。
- 三 汝は誰ぞ、そを何處にか負ひて行く。
- 四 こゝからあそこまではそんなに遠くはない。(口)
- 五 農夫は山のあなたへ歸りたり。

右の例にて、傍線を施せる語は皆名詞の代りに用ひられたり。かゝる語を代名詞といふ。

又右の例中、予・かれ・われ・汝・誰は人の名の代りに用ひられたれば、**人代名詞**といひ、こ・そ・何處・こゝ・あそこ・あなたは事物・場所・方向を

#### 指示代名詞

示せるものなれば**指示代名詞**といふ。代名詞を表示すれば左の如し。

#### 人代名詞

自	稱(第一人稱)	對	稱(第二人稱)	他	稱(第三人稱)	不	定	稱
(文)	(口)	(文)	(口)	(文)	(口)	(文)	(口)	
われ	わたし	なれ	あなた	かれ	あれ	たれ	だれ	
予	僕	汝	おまへ		あれ	なにがし	どなた	
僕	僕	君	君		あの(お)かた		どの(お)かた	
私	わたくし	貴君		あれ				
拙者		御許(女)						
わらは(女)								

指示代名詞

方向	場所	事物	類種/稱	
			文	口
こなた こち	こゝ	これ	(文) 近	
こち こなた	こゝ	これ	(口) 稱	
そなた そち	そこ	それ	(文) 中	
そち そなた	そこ	それ	(口) 稱	
あなた あなた	あそこ かしこ	あれ かれ	(文) 遠	
あなた あなた	あそこ あすこ	あれ	(口) 稱	
いつか いつか	いづこ いづく	なに いづれ	(文) 不定	
どちら どちら	どこ	なに どれ	(口) 稱	

練習三

練習

一次の文中の代名詞を指摘し、その種類及び稱を答へよ。

- (イ) それは餘りな御言葉です。私も日本男子です。何で命を惜しみませう。  
指
- (ロ) 農夫はあの山のこなたを通つて、あの川のあちらに行つた。
- (ハ) 君はそれとこれとどつちが好きか。どれでも君の好きな方を上げよう。
- (ニ) こゝは南門の跡、そこは金堂の跡、かしこは法華堂の跡、見まはせばいづこも懐舊の種ならぬはなし。
- (ホ) あそこにある本は君のではないか。いゝや、あれは僕のではない。あれは多分大西君のだらう。
- (ヘ) 汝のこのけなげなる振舞こそ何よりも賞すべきものなれ。
- (ト) 手前どもはこれでもどれでも結構です。
- (チ) 竹村がくれ夕餉たく煙ぞ靡くこゝかしこ。

二代名詞の定義を下せ。

第五章 動詞

動詞

練習四

一 本を讀み、又字を習ふ。  
 二 胡蝶三つ二つ、遠く去りまた近く來る。  
 三 朝早く起きる。(口)  
 四 あそこに大きな家がある。(口)

右の例にて讀み、習ふ、去り、來る、起きるは事物の動作を、あるは存在を表せり。かゝる語を動詞といふ。

練習

一、左の文中の動詞を摘出せよ。

- (イ) 一もと柳の垂れたるかげに床几ならべて團子を賣る。腰かけて煙ふく客あり。すゝぶりたる釜の下焚きつくるは主の老婆なり。

- (ロ) 磯に碎けて折れかへる波、波路の末に浮立つ雲、何物か造化の妙筆にもれん。  
 (ハ) 飴賣のチャルメラ聴けばうしなひしをさなき心ひろへることし。  
 (ニ) 新緑の頃になると、人間は戸内よりも野を思ひ、山を慕ひ、草木に親しむやうになる。  
 (ホ) 風が吹く、花が散る、蝶々のやうに花が舞ふ。  
 (ヘ) 梅が枝に飛ぶ黄鳥や、池の面に眠る鷗の姿はいかにも閑雅で、泰平の瑞相として人に愛でられる。  
 (ト) 春は花咲き、夏は茂り、秋は實り、冬は眠る。

二、動詞の定義を下せ。

第六章 形容詞

- 一 梅檀は二葉より芳し。  
 二 松青く砂白し。

形容詞

練習五

三 彼處に高い山が聳え、こゝに長い川が流れてゐる。(ロ)  
 四 夏は暑く、冬は寒い。(ロ)

右の例にて傍線を施せる語は事物の性質若くは状態をあらはせり。かゝる語を形容詞といふ。

練習

一、左の文中の形容詞を指摘せよ。

- (イ) 義は泰山よりも重く、命は鴻毛よりも輕し。
- (ロ) 果物ほど味ひの高く清きものはあらず。
- (ハ) 枇杷はうまけれど、種子大きく、肉少きは飽かぬ心地す。
- (ニ) 低き家狭き町、淋しき松、暖丈高き稻の穂、鼻の先に並びたる連山、をさなき頃より見なれたる一軒家、皆莞爾として我を迎ふるが如し。
- (ホ) 橋はあれど徒渡りせんいさゝ川いさごも清し水もさやけし。
- (ヘ) 賤しい人にも貴い行がある。

- (ト) 三度たく飯さへこはしやはらかし心のまゝにならぬ世の中。
- (チ) 淋しい秋の雨もあれば寒い風を伴ふ冬の雨もあり、又鬱陶しい五月雨もある。
- (リ) 暗い寒い冬から明るい暖い春に移り變る。
- (ヌ) 櫻の花は空青く水清い日本の風土に最もよく釣合つて、深山都市どこにあつても皆よろしい。

第七章 副詞

- 一 潮次第に満ち、水さかさまに流る。
- 二 岸の柳の葉は枯れて、ほろ／＼とこぼれる。(ロ)
- 三 風甚だ寒し。

この川の流は大層早い。(ロ)

右の例の中なる(一)の次第には動詞満ち、さかしまには動詞流る、

ほろくとは動詞こぼれるの意義を限定し、(二)の甚だは形容詞寒し、大層は形容詞早いの意義を限定す。かくの如き語を副詞といふ。

三 彼はいと速に走る。

や、暫く考へ居たり。

右の例の中なるいと、は副詞速ににや、は副詞暫くに添ひて、それぞれその意義を限定せり。かくの如く副詞は又他の副詞にも添ふことあり。

副詞は動詞・形容詞或は他の副詞に添ひてその意義を限定する語なり。

練習六

練習

一次の文中の副詞を指摘し、且つその副詞がいつれの語を

副詞

限定せるかを説明せよ。

- (イ) いやく降りしきる雨に、水はますく増加せり。
- (ロ) 夜も最早明けたるにや、人聲かすかに耳に入る。
- (ハ) 今朝は雲霧なごりなく晴れて、海山はるくと見渡さる。
- (ニ) 春もや、景色とふのふ月と梅。
- (ホ) かれは最もまじめに仕事を勉む。
- (ヘ) 決して再び失敗しないやうに、特に注意せねばならぬ。
- (ト) 春風緩かに來りて、奉納の旗をひらくと吹く。
- (チ) 汽車の窓より見れば、朝日花やかにさし上る。いと心地よし。
- (リ) 白い雲がときくぼつちり浮んでは、又一たまりもなく吹流される。
- (ヌ) 野にはもう菜の花の黄もすがれて、却つて白い菜の花がいつまでも咲残つてゐる。
- (ル) 雲をりく人をやすむる月見かな。
- (ヲ) ほろくと山吹散るか瀧の音。

- (ワ) この問題は、大抵解つた。
- 二、副詞の定義を下せ。

### 第八章 接 續 詞

- 一 國語英語及び數學の三科を學ぶ。
  - 二 文を學び且つ武を習ふ。
  - 三 春は來りぬ。されど鶯は未だ鳴かず。
- 右の例にて及び且つされどは上下の語句、文章を接續するため  
に用ひらる。かゝる語を接續詞といふ。

#### 接續詞

#### 練習七

- 一、次の文中の接續詞を指摘せよ。
- (イ) いしくも言ひける嬉しさよ。さりながら父と一緒に討死すること忠義

- (ロ) の道に叶はず。
  - (ハ) いま少し遠くに行つて見ようか。併し吾が脚では五町とは走れぬ。
  - (ニ) 富士は水彩もて作れる畫の如く、窓の右に立ち又左にあらはる。
  - (ホ) 霞か雲かはた雪か。
  - (ト) 明朝或は明晩はお尋ねいたさうと思つてゐます。もつとも雨天でしたら失禮いたすかも知れません。
  - (ヘ) 諸車の通行を禁ず。但し郵便車はこの限にあらず。
  - (ト) 今日風は吹くであらう。しかし雨は降るまい。
  - (チ) 僕は今日山登りをしようと思つてゐた。ところが急に雨が降り出したのでやめにした。
  - (リ) 今日雨は降つた。だから音楽會は人が少なかつた。
  - (ヌ) 飲食を節せよ。然らざれば健康に害あり。
- 二次の接續詞を用ひて文を作れ。
- 但し。然れども。はた。ところが。或は。



三、接續詞の定義を下せ。

### 第九章 感動詞

#### 感動詞

#### 練習八

- 一 あゝ哀しい哉。
  - 二 さてく 残念なことをしました。(口)
  - 三 いざや歌はん諸共に。
  - 四 あはれ太閤世を去りて、よつぎの主は幼し。
  - 五 おやくたいへんなことになりました。(口)
- 右の例にて傍線を施せる語はいづれも感動したる時に發する語なり。かゝる語を感動詞といふ。

#### 練習

一、左の文中にある感動詞を摘出せよ。

- (イ) 松島やあゝ松島や松島や。
- (ロ) いでや目にももの見せてくれうず。
- (ハ) あはれ今年の秋も往ぬめり。
- (ニ) おやまた忘れた。こんなに忘れて、まあどうしよう。
- (ホ) まあ、何といふ明るい快い感じを持つた社殿だらう。
- (ヘ) あはれ楽しき今日の日をいざ諸共に祝はなん。
- (ト) あら風が吹いて來た。
- (チ) えゝ口惜しい。

### 第十章 助動詞

- 一 よく勉め、又よく遊ぶべし。
- 二 明日は雨降らむ。
- 三 枝々星を帯びたり。

助動詞

四 僕は朝早く學校に出かけて往つた。(ロ)  
右の例にて、べし、むたり、及びたは何れも動詞に添ひて其の意義を助く。かゝる語を助動詞といふ。

- 一 東京は我が國の首都たり。
- 二 級中第一の勉強家は彼なり。
- 三 四と五との積は二十なり。
- 四 花の美しきなり。

右の如く助動詞には名詞代名詞數詞形容詞に添ふものもあり。

- 一 大いに勉強せざるべからず。
- 二 人を信ぜしめんと欲せば先づ自ら信ぜよ。

右の如く助動詞は又他の助動詞に添ふことあり。

練習九

一、左の文中より助動詞を摘出せよ。

- (イ) 己に恥ぢざる工夫をなすべし。
- (ロ) 遭難地に急行せしめたり。
- (ハ) 人に車を押させる。
- (ニ) 手折らるゝ人にかゝるや梅の花。
- (ホ) 雨は降るだらう、しかし風は吹くまい。
- (ヘ) 十五夜に影を見せざりし月は、今宵てり出でぬ。
- (ト) 心なき身も感などか起らざらん。
- (チ) 軍人は國家の干城たり。
- (リ) 彼の人は既に東京に行かれしなるべし。
- (ヌ) 歳月は流るゝごとし。分陰を惜しみて勉強せざるべからず。
- (ル) 見られずといへども罪は罪なり。

二、助動詞の定義を下せ。

第十一章 助詞

助詞

一 鳥が鳴く。  
 二 花を嵐山に見る。  
 三 人にして鳥にだに如かず。  
 四 彼は年なほ若けれども力強し。  
 五 行ける所まで行かう。

右の例のがをににしてにだにはどもまでは種々の語につきて、その語に意義を添へ、又は他の語との關係をあらはせり。かゝる語を助詞といふ。

助詞には種類甚だ多し。今左にこれを擧げん。

- 一、名詞・數詞・代名詞につゞく助詞  
 のがとをにへからよりまで。
- 二、動詞・形容詞・助動詞につゞく助詞  
 ばともどもにもにをがててつゝながら。
- 三、種々の品詞につゞく助詞  
 はもぞなんやかこそばかりのみだにすらさへ。

練習一〇

練習

- 一、左の文中の助詞を摘出せよ。
- (イ) 新緑の頃になると、私は少年の頃から何故となくたゞ懐しいといふ感情が胸の底から湧起るのが常である。
  - (ロ) みがかずば玉も鏡も何かせんまなびの道もかくこそありけれ。
  - (ハ) 語るなと一人に言へばまた一人語るななどと語る世の中、暑くつてもしばらく辛抱しろ。
  - (ニ)

體言用言

練習二

以上説き來れる中、名詞、數詞、代名詞を體言といひ、動詞、形容詞を用言といふ。

練習

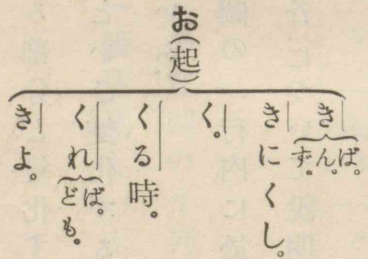
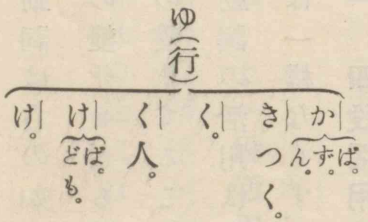
左の文章を品詞に分類せよ。

- (イ) 天は清く晴れたれども脚下は薄黒き雲の波一面にはびこれり。その雲綿の如し。見るく、東の方ばつとあかく紫となり、薄紅となり、遂に深紅色となる。
- (ロ) 山鳥の羽音囀る聲、風の戦ぐ鳴る、嘯く聲、叢の蔭、林の奥にすたく虫の音、空車、荷車の林を廻り、坂を下り、野路を横ぎる響、蹄で落葉を蹴散らす音、これは騎兵演習の斥候か。
- (ハ) 鳴く虫の音を踏み分け行けば、蛙とび、蝻、蠍とび、稀には蟹がさくと隠れ
- (ホ) 用意は整うたのに、會はまだ始まらない。
- (ヘ) 勉強さへすれば、どんな事でも出来る。
- (ト) 君は神戸から倫敦へ行く航路を知つてゐるか。

動詞の活用

單語篇(下)

第一章 動詞の活用



(イ) 行く。それとなく郷里のことなど語り出でて、秋の夜に焼く餅のにほひかな。  
 (ロ) 菊の香や奈良には舌き佛たち。  
 (ハ) 鳥羽殿へ五六騎いそぐ野分かな。

動詞は右の如く變化せざる部分と變化する部分とを有す。その變化せざる部分を語根といひ、變化する部分を語尾といひ、その變化することを活用といふ。

動詞の活用は必ず五十音圖の一行内に於てすれども、その形式は一樣ならず。左にその各について説明せん。

四段活用

一 四段活用

*のこ左はまり*

動詞の語尾が左例の如く五十音圖のアイウエの四段に亘りて變化するものを四段活用といふ。

押す	書く	動詞
押 <sup>ホ</sup>	書 <sup>カ</sup>	語根
さ	か	ア列
し	き	イ列
す	く	ウ列
せ	け	エ列
(ッ)	(コ)	オ列

上二段活用

二 上二段活用

*キチハカマリ*

動詞の語尾が左例の如く五十音圖のイウの二段に亘りて活用し、且つウ列に<sup>レ</sup>るの添はれるものを上二段活用といふ。

老ゆ	盡く	動詞
老 <sup>ホ</sup>	盡 <sup>ツ</sup>	語根
(ヤ)	(カ)	ア列
い	き	イ列
ゆ <sup>レ</sup> れる	く <sup>レ</sup> れる	ウ列
(エ)	(ケ)	エ列
(ヨ)	(コ)	オ列

上一段活用

三 上一段活用

*ギヒハカマリ*

動詞の語尾が左例の如く五十音圖のイ列にのみ活用し、これに<sup>レ</sup>るの添はれるものを上一段活用といふ。

下二段活用

動詞	語根	ア列	イ列	ウ列	エ列	オ列
煮る	(煮 <sup>キ</sup> )	(ナ)	にに <small>きる</small> れる	(ク)	(ケ)	(コ)
着る	(着 <sup>キ</sup> )	(カ)	きる	(ク)	(ケ)	(コ)
煮る	(煮 <sup>キ</sup> )	(ナ)	にに <small>きる</small> れる	(ク)	(ケ)	(コ)

四 下二段活用

動詞の語尾が左例の如く、五十音圖のウエの二段に亘りて活用し、且つウ列にるの添はれるものを下二段活用といふ。

動詞	語根	ア列	イ列	ウ列	エ列	オ列
受く	受 <sup>ウ</sup>	(カ)	(キ)	くく <small>れる</small>	け	(コ)
隔つ	隔 <sup>タ</sup>	(タ)	(チ)	つつ <small>れる</small>	て	(ト)

下二段活用

五 下二段活用

動詞の語尾が左例の如く、五十音圖のエ列にのみ活用し、これにるの添はれるものを下二段活用といふ。而してこの活用に屬する動詞は蹴るの一語あるのみ。

動詞	語根	ア列	イ列	ウ列	エ列	オ列
蹴る	(蹴 <sup>カ</sup> )	(カ)	(キ)	(ク)	ける <small>れる</small>	(コ)

正格活用

カ行變格活用

以上五種の活用を正格活用といふ。

六 カ行變格活用

動詞の語尾が左例の如く、五十音圖のイウオの三段に亘りて活用し、且つウ列にるの添はりて活用するものは、たゞ來の一語あるのみなれば、これをカ行變格活用といふ。

サ行變格活用

七 サ行變格活用

動詞の語尾が左例の如く、五十音圖のイウエの三段に亘りて活用し、且つウ列に<sup>レ</sup>るれの添はりて活用するものは、たゞ爲の一語あるのみなれば、これをサ行變格活用といふ。

動詞	語根	ア列	イ列	ウ列	エ列	オ列
來	(來 <sup>ク</sup> )	(カ)	き	くる	(ケ)	こ

動詞	語根	ア列	イ列	ウ列	エ列	オ列
爲	(爲 <sup>ス</sup> )	(サ)	し	する	せ	(ソ)

但しすは他語と熟合してサ行變格活用の動詞を作る。  
罪<sup>ツミ</sup>す。 旅<sup>ツ</sup>す。 運動<sup>ツク</sup>す。 辱<sup>ツ</sup>くす。

ナ行變格活用

八 ナ行變格活用

動詞の語尾が左例の如く、五十音圖のアイウエの四段に亘りて活用し、且つウ列に<sup>レ</sup>るれの添はりて活用するものは、たゞ死ぬ<sup>シヌ</sup>往ぬ<sup>ユ</sup>の二語あるのみなれば、これをナ行變格活用といふ。

動詞	語根	ア列	イ列	ウ列	エ列	オ列
死ぬ	死 <sup>シ</sup>	な	に	ぬぬぬ れる	ね	(ノ)

ラ行變格活用

九 ラ行變格活用

動詞の語尾が左例の如く、五十音圖のアイウエの四段に亘りて活用すること、なほ四段活用の如くなれども、イ列にて言ひ切らるゝものは、たゞ有り<sup>アリ</sup>居り<sup>イリ</sup>侍り<sup>シリ</sup>の三語あるのみなれば、これをラ

行變格活用といふ。

動詞	語根	ア列	イ列	ウ列	エ列	オ列
有	有 <sup>ル</sup>	ら	り	る	れ	(ロ)

猶高かり美しかりの如く形容詞高く美しくにこの動詞ありのつゞきて約められたるもの及び明瞭なり平然たるの如く副詞明瞭に平然とに同じく動詞ありのつゞきて約められたるものも亦便宜上ラ行變格活用と見做す。

一〇 動詞活用の識別法

以上述べたる正格變格九種の活用中左の六種に屬する動詞はその數極めて少ければ悉くこれを諳記すべし。

變格活用

動詞活用の識別法

上一段活用

著る 煮る 似る 干る 見る (顧みる、  
試みる、) 射る 鑄る 居る 率ゐる

下一段活用

蹴る

カ行變格活用

來

サ行變格活用

爲

(この外信ず、  
勉強すの類)

ナ行變格活用

死ぬ

往ぬ

ラ行變格活用

有り

居り

侍り

○四段上二段下二段の三活用に屬する動詞はその數甚だ多ければ左の識別法によりてこれを知るべし。

一「讀まず」「書かず」の如く打消のずがア列の音につゞくものは四段活用なり。

二「落ちず」「悔いず」の如く打消のずがイ列の音につゞくものは



動詞の語尾の假名遣

ア行

ワ行

ヤ行

は上二段活用なり。  
三「榮えず」「兼ねず」の如く打消のずがエ列の音につゞくものは下二段活用なり。

なほ動詞の語尾の假名の紛れ易きは、ア行ハ行ヤ行ワ行なれば、大體左の如く心得おくべし。

ア行活用にては

(得) え う うれ

(射) (鑄) い いる うれ (下二段活用)

ワ行活用にては

植 飢 据 ゑ う うれ (下二段活用)

(居) 率 ゐ ある うれ (上一段活用)

ヤ行活用にては

老 悔 報 い ゆる ゆれ (上二段活用)

甘 ゆ 嘶 ゆ 癒 ゆ 覺 ゆ

聞 ゆ おもほゆ 消 ゆ 凍 ゆ 越 ゆ

榮 ゆ 牙 ゆ 戯 ゆ (そばトモ) 聳 ゆ

絶 ゆ 費 ゆ 潰 ゆ 痿 ゆ 生 ゆ え ゆる ゆれ (下二段活用)

映 ゆ 冷 ゆ 殖 ゆ 吠 ゆ まみゆ

見 ゆ 悶 ゆ 燃 ゆ 萌 ゆ

以上の外はすべてハ行活用なりと知るべし。

ザ行ダ行の假名も紛るゝことあれど、ザ行活用は左の一語のみなり。

混 ぜ ず ずる ずれ (下二段活用)

この外に講ず、變ず等の如くサ行變格に活用するものあり。其

ダザハ  
行行行

練習二

練習

の他はすべてタ行活用なりと知るべし。

一左の文中より動詞を摘出してその活用を示せ。

- (イ) 頭熱して眠られず、起きて庭を歩むに、樹梢を漏れ来る月の光碧にして、蟲聲雨の如く四方に聞ゆ。
- (ロ) 不自由を常と思へば不足なし。心に望おこらば困窮したる時を思ひ出すべし。
- (ハ) スバルタ武士は死を見ることが歸するが如く、瓦となりて全からんよりも玉となりて砕けんことを希ひ、祖國の爲に一命を捨つるを以て無上の名譽とせり。
- (ニ) 五月雨に四尺伸びたる竹の、手水鉢の上に蔽ひ重なりて、餘れる一二本は高く軒に逼れば、風誘ふたびに戸袋をすつて縁の上にもはらくと所擇ばず、緑を滴らす。

二左の動詞の活用を類別せよ。

- 強ふ。老ゆ。立身す。煮る。居り。居る。死ぬ。死す。弑す。植う。用ふ。任す。任ず。朽つ。亡ぶ。信す。撫づ。懸く。碎く。解く。亂る。飢う。怖づ。講ず。聳ゆ。堪ふ。

三左の文中の動詞の活用に誤あらば正せ。

- (イ) 彼の勤勉誠に感づるに餘りあり。
- (ロ) 汝に出するものは汝にかへる。
- (ハ) 人如何に笑うとも自ら守る所堅く、行道に違わすば何の恥する事かこれあらん。
- (ニ) 困難に絶えうる人は、年老ひて憂なからん。
- (ホ) 鷹は飢ゆとも穂はつまず。
- (ヘ) 君に事を親に仕う。
- (ト) 我が言ふ事を用いずば後に悔ふとも及ばじ。
- (チ) 月霜の如く冴へ、風海の如く咽ふる夜は、人籟すべて絶へて、直に至上の聲を聞く心地す。

動詞の活用形

- (リ) 教いゆるは學ぶの半ばなり。
- (ヌ) 榮ゆふる大御代祝えや祝え。
- (ル) 式終りて一同校庭の北隅に記念樹を植うゆ。

第二章 動詞の活用形 (別表参照)

動詞はその語尾活用して種々の形に變ずるものなることは已にこれを説明したり。而してこれ等の語形をその用法によりて、左の六つに分類することを得。

未然形

一、書を讀よまば。  
すむん。 早く起たきば。  
すむん。

着物を着き。  
すむん。 運動せよ。  
すむん。

右は多く「ば」「むん」「ず」などに連りて、動作の未だ成立せぬ意をあ

連用形

らはすに用ふる形なれば、これを未然形と名づく。

二、書を讀み始はむ。 早く起たきにくし。

着物を着飾かる。 運動し易いし。

右は多く用言に連ぬるに用ふる形なれば、これを連用形と名づく。

なほ此の形は動作のつゞきて起る時、前の動作をいひさす形となり、又云ひするて名詞となすことあり。

書を讀み、字を習ふ。

文字の讀み、を習ふ。  
(霞・謠・光・氷・扇・舞・取扱など皆これなり)

三、書を讀む。 早く起たく。

着物を着る。 運動す。

右は多く文を終止するに用ふる形なれば、これを終止形と名づく。

終止形

連體形

く。  
なほこの形が動詞の本體なれば、或動詞を擧ぐる時は、常に終止形を示すものと知るべし。

四、書を讀む人。

朝早く起くる時。

着物を着る人。

運動する時。

右は多く名詞・數詞・代名詞即ち體言に連ぬるに用ふる形なれば、これを連體形と名づく。

已然形

五、書を讀め

朝早く起くれ

着物を着れ

運動すれ

右は多く「ば」「ど」「ども」などに連りて、動作の已に成立せる意をあらはすに用ふる形なれば、これを已然形と名づく。

命令形

六、流暢に讀め。

早く起きよ。

着物を着よ。

よく運動せよ。

右は命令の意をあらはすに用ふる形なれば、これを命令形と名づく。

練習二三

練習

- 一、動詞の活用形の種類を述べよ。
- 二、命令形に「よ」を添ふるものと、然らざるものとを擧げよ。
- 三、左の動詞を活用によりて類別し、その六つの活用形を表せよ。

- |         |         |         |          |
|---------|---------|---------|----------|
| (イ) 拂ふ。 | (ロ) 懲る。 | (ハ) 閉○。 | (ニ) 抵抗す。 |
| (ホ) 鋸る。 | (ヘ) 強ふ。 | (ト) 冷ゆ。 | (チ) 留む。  |
| (リ) 釣る。 | (ヌ) 恨む。 | (ル) 掘○。 | (ヲ) 辯す。  |

(ワ) 有り。 (カ) 率ゐる。 (ヨ) 顧みる。 (タ) 報むかひ。

四、次の文中の動詞の活用の種類及び活用形の名を示せ。

(イ) 徐ろに熟慮して速かに行へ。

(ロ) 恩を受けば必ず報いよ。

(ハ) 花咲く春のあけぼのを、はやとく起きて見よかしと鳴く鶯も心して、人の夢をぞさましける。

(ニ) 大空にそびえて見ゆる高嶺にも登れば登る道はありけり。

(ホ) 白く立つ煙黒く飛ぶ鳥。見渡せば秋はまた都の空にも宿りかつ遊ぶ。

(ヘ) それ身、都門の中に生活し、而して身體を強固にし、精神を旺盛ならしめんことは、時に郊外に散策して自然の壯觀を眺め、以てその心身を養ふに在り。

(ト) 常に良き著述に親しむ者は、只獨り居れども寂しき事を覺えず。

(チ) そのかみ、金殿玉樓を望みて、うちつゞく都大路を、大官人の櫻かさし、紅葉かさして往來しけむ、今にして思へば唯一場の夢に過ぎず。

五、次の文中に動詞の活用形の誤れるものあらば正せ。

(イ) 房總二州の山々は霞に消えて視るとも見えず。

(ロ) 老いて後、悔ゆこと勿れ。

(ハ) 余の記さんとする所はその風致にあり。

(ニ) 世には無爲無能にして、その父母の恩に報ゆ事能はざるものあり。

(ホ) 人はパンのみにて生くものにあらず。

(ヘ) 日の暮るを待ちて檐の岐阜提灯に火を點づ。

(ト) 才學なくば身を立つ能はず。

(チ) 約束を違ふ時は信用を失ふべし。

(リ) 何事も自らして、他人に任ずことなし。

(ヌ) 與ふは受くよりも幸なり。  
崩る崖倒る家、逃げ惑ふ人々の泣叫ぶ聲、友はそも如何にかせし。

口語の動詞

第三章 口語の動詞

文語  
 四段  
 変  
 変  
 上  
 上  
 下  
 下  
 加  
 加  
 下  
 下  
 文語  
 四段  
 変  
 変  
 上  
 上  
 下  
 下  
 加  
 加  
 下  
 下

四段活用

口語動詞の活用

一、四段活用

口	文	口	文	口	文	活用
四段	な變	四段	ら變	四段	書	語根
死		有		書		未然
な	な	ら	ら	か	か	連用
に	に	り	り	き	き	終止
ぬ	ぬ	る	り	く	く	連體
ぬ	ぬ	る	る	く	く	已然(口文)
ね	ぬ	れ	れ	け	け	命令
ね	ね	れ	れ	け	け	

人あり—人がある  
 死ぬる—死ねぬ  
 死ぬれば—死ねば

右の表の如く口語にては文語のナ變ヲ變トモに四段活用となる。  
 ◎文語動詞の已然形に當るところは、口語動詞にてはすべて

上一段活用

二、上一段活用

假定の條件を示す意味となれば假定形と名づく。

口	文	口	文	活用
上一	上二	上一		語根
起		(見)		未然
き	き	み	み	連用
き	き	み	み	終止
きる	く	みる	みる	連體
きる	く	みる	みる	已然(口文)
きれ	くれ	みれ	みれ	命令
きよ	きよ	みよ	みよ	

早く起く—早く起  
 早く起くる人—早  
 早く起くる人—早  
 早く起くれば—早  
 早く起くれば

右の表の如く文語の上二段上一段は口語にては共に上一段活  
 用となる。

三、下一段活用

下一段活用

力 變

右の表の如く、文語の下二段下一段は口語にては共に下一段活用となる。

四、力行變格活用

口		文		活用	語根
下二	下一	下二	下一		
受				(蹴)	
け	け	け	け	未然	
け	け	け	け	連用	
ける	く	ける	ける	終止	
ける	くる	ける	ける	連體	
ける	くれ	ける	けれ	已然(口)	已然(文)
けよ	けよ	けよ	けよ	命令	命令

恩を受く—恩を受ける  
 恩を受くる人—恩を受ける人  
 恩を受ければ—恩を受ければ

口		文		活用	語根
か變	(來)	か變	(來)		
こ	こ	こ	こ	未然	
き	き	き	き	連用	
くる	く	くる	くる	終止	
くる	くる	くる	くる	連體	
くれ	くれ	くれ	くれ	已然(口)	已然(文)
こい	こよ	こい	こよ	命令	命令

人—人がくる  
 早くこよ—早くこい

右の表の如く、口語にては終止形及び命令形に文語と異なる點あり。

サ 變

五、サ行變格活用

口		文		活用	語根
さ變	(爲)	さ變	(爲)		
せ	せ	せ	せ	未然	
し	し	し	し	連用	
する	す	する	す	終止	
する	する	する	する	連體	
すれ	すれ	すれ	すれ	已然(口)	已然(文)
せよ	せよ	せよ	せよ	命令	命令

勉強をせず—勉強をせぬ  
 勉強をす—勉強をしない

右の表の如く口語にては未然形終止形及び命令形に文語と異なる點あり。以上の如く口語動詞の活用は四段上一段下一段力變サ變の五種に減ず。

練習

- 一次の文中の動詞の活用及び活用形を問ふ。  
 (イ) 最後に出る者が戸を締める。

- (ロ) しよう決心すれば、きつと出来る。
  - (ハ) 猿も木から落ちることがある。
  - (ニ) 怨に報いるに徳を以てするといふこともある。
  - (ホ) 恥ぢることを知らないものは、自ら身を辱めるものである。
  - (ヘ) 右を立てれば左が立たぬ。両方立てれば身が立たぬ。
  - (ト) 世の學問に志す者は、とかく低いところを経ないで、すぐに高い所へ登らうとする弊がある。それでは低いところにさへ達することも出来ない。
  - (チ) 湯を浴びた猫は水を恐れる。
  - (リ) 猫が肥えれば、鯉節が痩せる。
  - (ヌ) 棄てる神があれば、助ける神がある。
  - (ル) 打つも撫でるも親の恩。
- 二次の口語動詞を活用せしめて、六つの語形を作れ。
- 吠える。 朽ちる。 飢える。 閉ぢる。 老いる。 留める。 死ぬ。
  - 垂れる。 信ずる。 榮える。

形容詞の活用

第四章 形容詞の活用

形容詞にも活用あり。されど其の活用は五十音圖の同一行の間に行はるゝにあらで、力行サ行の兩行に跨りて活用するものなり。而してその活用に二種あり。ク活用とシク活用とこれなり。

「清し」

- 一、水清くば大魚すまじ。 (未然形)
- 水清くとも大魚すまむ。 (連用形)
- 二、水清く流る。 (連用形)
- 花美しくば香も亦よからむ。 (未然形)
- 花美しくとも毒あらむ。 (連用形)
- 三、水清し。 (終止形)
- この花甚だ美し。 (終止形)

「美し」



四、水清き池あり。

美しき花咲けり。

(連體形)

五、水清ければ大魚すまず。

(この花美しければ君に與へむ。

(已然形)

水清けれども大魚すむ。

(この花美しけれども毒あり。

形容詞には命令なし。

右の「清し」の如く活用するをク活用の形容詞といひ、「美し」の如く活用するをシク活用の形容詞といふ。今これを表示すれば左の如し。

形容詞活用表

活用	語根	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形
ク活用	清	ク	ク	シ	キ	ケレ
シク活用	美	シク	シク	シ	シキ	シケレ

連用形は左例の如く副詞に轉ずる語形なれば、又副詞形ともい

口語の形容詞

ふ。  
早く起き、遅く寝ぬ。

口語の形容詞の活用は左の如し。

口	文	口	文	活用	語根	未然	連用	終止	連體	已然(文)
シク活用	美	ク活用	清							假定(口)
口	美	口	清							
シク	美	ク	清							
しく	美	く	清							
しく	美	く	清							
しく(う)	美	く(う)	清							
しい	美	い	清							
しい	美	い	清							
しい	美	い	清							
しけれ	美	けれ	清							
しけれ	美	けれ	清							

右のうち連用形は關東にては「ク」の形を用ひ、關西にては「ウ」の形多し。「シク」活用の終止形に「イ」を加ふるは口語形容詞の特色なり。又「ケレ」の形は口語にては已然未然の差なく、たゞ條件を示すに止まるなり。

練習一五

一、左の文中の形容詞を摘出し、且つその何形の語形に表れ居るかを説明せよ。

(イ) 手のわるき人の憚らず文書き散らすはよし。見苦しとて人に書かすはうるさし。

(ロ) 森戸の川を渡るに、一岬、松深く風情優しき所こゝに明神の祠あり。岩礁漸く繁し。

(ハ) 雨も好し、露も好し、霞も霽も天より降るものの面白からぬは無きが中に雪は特にめでたし。

(ニ) 両方の手平を高く立てて、雪の如き眞白い腹を出して碧い海に一文字。朝夕は淡き易けれど、日中は堪へ難し。

(ヘ) 遠き慮なければ必ず近き憂あり。

(ト) 大原女の打連れて来るも懐かしきに、下行く水の心地よき響を聞かせたるなど、見るもの聞くものすべて昔ゆかしきあたりなり。

(チ) 色は美しうても、味は辛うて、香もわるい。

(リ) どんよりと曇つて、寒くもなく暑くもない日和を花曇といふ。夜は照りもせず曇りもはてぬ朧月夜、雲霞とまがふ花には最もふさはしい景色である。

(ヌ) 石が大きければ水煙も夥し。

(ル) ひもじい時にまづいものはない。

(ヲ) わるいことはせぬがよろしうございます。

二、左の形容詞を活用せしめて、その五つの語形を表に作れ。

痛し。 羨し。 勇し。 著し。 辛し。 見にくし。 尊し。

第五章 音便

動詞の音便

動詞の連用形よりてたりたに連なる時、その語尾が發音の便宜上他の音に轉ずることあり。これを動詞の音便といひ、その文

イ音便

字をも書き改めざるべからず。動詞の音便に左の四種あり。  
一、イ音便 きぎのいに轉ずるもの。

説き。 説いて(文語)(口語)  
説いた(口語)  
説いたり(口語)

泳ぎ。 泳いで(文語)(口語)  
泳いだ(口語)  
泳いだり(口語)

○指してが「指いて」となるやうに、稀に「し」が「い」に轉ずることもあり。

ウ音便

二、ウ音便 ひのうに轉ずるもの。

買ひ。 買うて(文語)(口語)  
買った(口語)  
買うたり(口語)

撥音便

三、撥音便 にびみの撥音んに轉ずるもの。

死に。 死んで(文語)(口語)  
死んだ(口語)  
死んだり(口語)

學び。 學んで(文語)(口語)  
學んだ(口語)  
學んだり(口語)

飲み。 飲んで(文語)(口語)  
飲んだ(口語)  
飲んだり(口語)

促音便

四、促音便 ちひりの促音つに轉ずるもの。

勝ち。 勝つて(文語)(口語)  
勝つた(口語)  
勝つたり(口語)

買ひ。 買つて(文語)(口語)  
買った(口語)  
買うたり(口語)

形容詞の音便

イ音便

釣<sup>り</sup>。 釣<sup>つ</sup>て(文語)(口語)  
 釣<sup>つ</sup>た(口語)  
 釣<sup>つ</sup>たり(口語)

形容詞の音便

一、イ音便 きのいに轉ずるもの。

善<sup>き</sup>。哉 善<sup>い</sup>。哉

美<sup>し</sup>。き。花 美<sup>しい</sup>。花

二、ウ音便 くのうに轉ずるもの。

暑<sup>く</sup>。なる 暑<sup>う</sup>。なる

深<sup>く</sup>。て 深<sup>う</sup>。て

●又形容詞の連用形より轉じたる副詞がサ行變格の「す」と合して熟語の動詞となる時に、その語尾のくがウ音便を

ウ音便

起<sup>す</sup>ことあり。

ウ音便 全<sup>く</sup>。す 全<sup>う</sup>。す

練習一六

練習

一、左の文中の動詞・形容詞の音便を指摘してその原音を示せ。

- (イ) 休暇中に舊師を訪うて小學校時代を偲ぶ。
- (ロ) その程々に從つて祈らぬ神佛もなく立て願もなし。
- (ハ) 旅に病んで夢は枯野をかけ廻る。
- (ニ) 柿食うて洪水の詩を草しけり。
- (ホ) 振返つて見ると神殿のあたりはずつかり深い霧に包まれて、黒々と晝でも暗い程生ひ茂つてゐる樹林の中を、かつぎりと切り開いたやうに路線の白い色が暮れ残つて續いて見えるのが、妙に嚴肅な氣分を起させた。
- (ヘ) 何處かで逢うたことのあるやうな人だ。

二、左の文の誤を正し、且つその理由を述べよ。

- (イ) 飛むで火に入る夏の蟲。
- (ロ) 養ふた上に敬ふことが大事だ。
- (ハ) 思ふて居るばかりでは埒があかぬ。言ふて見よ。
- (ニ) 今よりはよく行を慎むでかゝる過は再びすまじと誓ふたり。
- (ホ) 苦しひことも、恥づかしひこともすべて堪へ忍むで、仕事にあたらうと思ふ。
- (ヘ) 草花など作つて餘生を樂しむで居ります。
- (ト) 首尾よふ卒業せられておめでたふございます。
- (チ) 林檎食ふて牡丹の前に死なん哉。
- (リ) 負ふた子に髪なぶらるゝ暑さ哉。
- (ヌ) 轉むでも笑ふてばかり難かな。
- (ル) 翼くは仰ひで天に恥ぢされ。
- (ヲ) 任重ふして負荷に堪へず。

助動詞の種類及活用

受身

第六章 助動詞の種類及活用

第六章 助動詞の種類及活用

第六章 助動詞の種類及活用

(参照表)

- (ワ) 來臨を辱ふす。
- (カ) 大いに意を強ふするに足る。

一 受身の助動詞

- 一 犬人に打たる。
- 二 犬人に蹴らる。

右のらるは他より動作を受くる意をあらはす。これを受身の助動詞といふ。

助動詞	未然	連用	終止	連體	已然	命令
る	れ	れ	る	る	る	れよ
らる	られ	られ	らる	らる	らる	られよ

(下二段活用  
に同じ)

可能

口語にはれるられるといふ助動詞あり。  
犬が人に打たれる。 犬が人に蹴られる。

二 可能の助動詞

- 一 一日に十里の道を行かる。
- 二 六尺の屏風も飛び越えらる。
- 三 腰間の秋水、鐵をも斷つべし。
- 四 その勢あたるべからず。

右のるらるべしべからはその動作を成し得る意をあらはす。  
これを可能の助動詞といふ。 可能の助動詞は活用、受身の助動詞と同じと雖も命令形無し。

助動詞	未然	連用	終止	連體	已然	命令
べし	べく	べく	べし	べき	べけれ	○
べかり	べから	べかり	(べかり)	(べかる)	べかれ	○

(形容詞に同じ)

自然的可能

括弧内のものは現代文にては殆ど用ひられず。  
口語にはれるられるといふ助動詞あり。  
一日に十里の道を行かれる。  
六尺の屏風も飛び越えられる。  
● 可能の助動詞は又轉じて動作が自然に起りて止められぬ意をあらはすことあり。これを自然的可能といふ。  
亡き友の事のみ思はる。  
たゞ夢とのみ考へらる。  
口語にては「思はれる」「考へられる」といふ。

使役

三 使役の助動詞

- 一 生徒に字を書かす。
- 二 大工に家を建てさす。

三 下男に田を耕さしむ。  
 右のす・さす・しむは他をして動作をなさしむる意をあらはす。  
 之を使役の助動詞といふ。

助動詞	未然	連用	終止	連體	已然	命令
す	せ	せ	す	する	すれ	せよ
さす	させ	させ	さす	さする	さすれ	させよ
しむ	しめ	しめ	しむ	しむる	しむれ	しめよ

(下二段活用  
に同じ)

口語にはせる・させるといふ助動詞あり。

生徒に字を書かせる。

大工に家を建てさせる。

崇敬

四 崇敬の助動詞

一 父は謠曲を好まる。

- 二 校長は毎年上京せらる。
  - 三 主上都を出て立たす。
  - 四 御元服も院にてせさす。
  - 五 おほやけにも屢行幸せしめ給ふ。
  - 六 殿下式場に臨ませらる。
  - 七 侍臣を差遣せさせらる。
  - 八 皇太子御位に即かしめらる。
  - 九 攝政宮殿下北海道に行啓せさせ給ふ。
  - 一〇 春宮四つにならせ給ふに譲り申させ給ふ。
  - 一一 殿下にはいと快げに笑ひたまふ。
  - 一二 御年五十にあまりましますとぞ聞く。
- 右のる・らる・すすすしめせらる・させらる・しめらる・させたまふ。

ましますは他の動作を敬ふ意をあらはす助動詞なり。

口語にはれる・られる・せられる・させられる・あそぶ・あそぶなさを用ふ。

父上は謠曲を好まれる。

殿下は式場に臨ませられる。

鶏をお飼ひあそぶ。

朝早くお起きなさる。

一 謹みて新年を賀したてまつる。

二 まことそらごと見給へんとて、まうで來つるなり。

三 午後二時まで御待ちいたします。(口)

四 事實をお話しましませう。(口)

五 いくつといふことも更におぼえ侍らず。

六 本日出發仕り候。

七 この頁を読みましたら、まゐります。(口)

時 完了

右のたてまつる・給へ(下二段活用)いたしまし侍ら候・ましますは動作を丁寧にいふ助動詞なり。

かくの如く他の動作を敬ひ、又は動作を丁寧にいひあらはす時に用ふる助動詞を崇敬の助動詞といふ。

五 時の助動詞

(イ) 完了の助動詞

一 書を読み

つ。ぬ。たり。

二 書を読み

右のつ・ぬ・たりは動作の完了せる意をあらはす。これを完了の助動詞といふ。



過去

助動詞	未然	連用	終止	連體	已然	命令
つ	て	て	つ	つる	つれ	てよ
ぬ	な	に	ぬ	ぬる	ぬれ	ね
たり	ら	り	り	る	れ	〇
り	(ら)	(り)	り	る	(れ)	〇

括弧内のものは現代文にては殆ど用ひられず。

(下二段に同じ)  
(ナ變に同じ)  
(ラ變に類す)

(ロ) 過去の助動詞

- 一 花、散りき。
- 二 花、散りけり。

右のきけりは動作の既に過ぎ去りし意をあらはす。これを過去の助動詞といふ。その活用左の如し。

助動詞	未然	連用	終止	連體	已然	命令
き	〇	〇	き	し	しか	〇
けり	(けら)	(けり)	けり	ける	けれ	〇

(特殊活用)  
(ラ變に類す)

括弧内のものは現代文にては殆ど用ひられず。

又きけりは更につぬたりけりの連用形に添へて用ひらるゝことあり。但し、現代文にはあまり用ひられず。

- 一 花、散りてき。
- 二 花、散りてけり。
- 三 花、散りにき。
- 四 花、散りにけり。
- 五 花、散りたりき。

未  
來

- 六 花、散りたりけり。
- 七 花、散れりき。
- 八 花、散れりけり。

(ハ) 未來の助動詞

- 一 明日、空晴れむ(ん)

右のむは動作の未來に起る意をあらはす。これを未來の助動詞といふ。

助動詞	未然	連用	終止	連體	已然	命令
む	○	○	む	む	め	○

(特殊活用)

又むは更につぬたりりの未然形に添へて用ひらるゝことあり。但し、現代文にはあまり用ひられず。

未然形

- 一 花、散りてむ。
- 二 花、散りなむ。
- 三 花、散りたらむ。
- 四 花、散れらむ。

口語には過去時にた未來時にう、ようといふ助動詞あり。

花が散つた。

花が散らう。

明日は雨が霽れよう。

練習一七

左の文中より受身可能使役崇敬時の助動詞を指摘し、且つその活用をいへ。

(イ) 勝海舟若き頃西洋式の兵術を學びしが常に良書の得がたきを歎ぜり

- (ロ) パリツシーはその父母甚だ貧しかりければ、更に學校の教育を受けたることはなかりき。
- (ハ) 彼は篤志家に救はれ、學資を給せられて、勉學することを得、遂に學界の泰斗と仰がるゝに至れり。
- (ニ) 囊中の文書は皆公岩倉具視公の蟄居中に計畫せられて、玉松操といふ人に起草せしめられつゝ、復古經綸の策案なりき。
- (ホ) 朝は水澄めれば、底の眞砂も數へつゝべし。
- (ヘ) この兒利根こそ生れつきたらめなほ幼くして、その氣根のほどもはかりがたく、家富めりとも見えねば、黄金のこと心得られず。
- (ト) たゞかれて、晝の蚊を吐く木魚かな。
- (チ) 彼に取つて如何に苦戰であつたかは、之によつて察せられる。
- (リ) 明日の漢文をしらべようと本は出したがよく讀めない。
- (ヌ) 天皇は國民と親しく協力して、新文明を吸收しようと思はせられた。霞が浦といへば既に静かな柔かい感じに打たれる。自然の可能
- (ル) 長男は商業學校を卒業させて實業に就かせ、次男は陸軍士官學校に入學
- (ヲ) させて陸軍士官にした。

推量

六 推量の助動詞

- 一 靜心なく花の散るらむ。
  - 二 いつの頃なりけむ、確には覺えず。
  - 三 明日は雨降るべし。
  - 四 夜はまだ明くまじ。
  - 五 來客あるらしければ、面會せずして歸らむ。
- 右の外、未來の助動詞むも亦推量の助動詞として用ひらるゝことあり。
- 明日は雨降らむ。

猶現代文には用ひられざれども、らしめりましと云ふ推量の助動詞あり。

三吉野の山の白雪積るらしふる里寒くなりまさるなり。  
 立田川紅葉亂れて流るめり渡らば錦中や絶えなむ。  
 山里に散りなましかば櫻花匂ふさかりも知られざらまし。  
 推量の助動詞の活用は左の如し。

助動詞	未然	連用	終止	連體	已然
らむ	○	○	らむ	らむ	らめ
けむ	○	○	けむ	けむ	けめ
べし	べく	べく	べし	べき	べけれ
まじ	まじく	まじく	まじ	まじき	まじけれ
らし	らしく	らしく	らし	らしき	らしけれ

(特殊活用)

(形容詞に同じ)

べしは命令にも用ひらる。古文に用ひられたるらしには活用なし。

口語にはだらうたであらうまいらしいといふ助動詞あり。

(一) 花が散るだらう。

- (二) いつの頃であつたであらう。
- (三) 明日は雨が降るだらう。
- (四) 夜はまだ明けまい。
- (五) 來客があるらしいから、面會しないで歸らう。

打消

七 打消の助動詞

- 一 花咲かず。
- 二 予は出席せざりき。
- 三 君はまだ遠くは行かじ。

右の「ず」「ざり」「じ」は動作の起らざる意をあらはす。之を打消の助動詞といふ。そのうち「じ」には推量の意あり。

指定

助動詞	未然	連用	終止	連體	已然	命令
ず	ず	ず	ず	ぬ	ね	○
ざり	ざら	ざり	ざり	ざる	ざれ	ざれ
じ	○	○	じ	じ	じ	○

(特殊活用)

(ラ變に同じ)

口語にはないぬといふ助動詞あり。

花が咲かない。(ぬ)

八 指定の助動詞

- 一 かしこに見ゆるは我が家なり。
- 二 花の散りくるなり。
- 三 彼の性質は甚だよろしきなり。
- 四 君君たり、臣臣たり。

右のなりは事物動作有様を、たりは事物を指し定むる意をあら

はす。これを指定の助動詞といふ。

助動詞	未然	連用	終止	連體	已然	命令
なり	なら	なり	なり	なる	なれ	なれ
たり	たら	たり	たり	たる	たれ	たれ

(ラ變に同じ)

口語には體言の指定にだである、用言の指定にのであるのだといふ助動詞あり。

- (一) かしこに見えるのは我家(だである。)
- (二) 花の散り来る(のだ。のである。)
- (三) かれの性質は甚だよろしい(のだ。のである。)
- (四) 君は君(だである。)

九 咏嘆の助動詞

- 一 秋の野に人待つ蟲の聲すなり。

咏嘆

比況

二 見渡せば花も紅葉もなかりけり。  
 右のなりけりは咏嘆の意をあらはす。これを咏嘆の助動詞といふ。

一〇 比況の助動詞

- 一 落花、雪の如し。
- 二 歲月流るゝ(が)如し。

右の如しは比況の意をあらはす。これを比況の助動詞といふ。

助動詞	未然	連用	終止	連體	已然
ごとし	ごとく	ごとく	ごとし	ごとき	〇

(形容詞に類す)

口語にはやうだといふ助動詞あり。

落花が雪のやうだ。

歲月は流れるやうだ。

希望

一一 希望の助動詞

- 一 東京に行きたし。
- 二 月見に行かまほし。

右のたし・まほしは動作を希望する意をあらはす。これを希望の助動詞といふ。そのうちまほしは現代文には用ひられず。

助動詞	未然	連用	終止	連體	已然
たし	たく	たく	たし	たき	たけれ
まほし	まほしく	まほしく	まほし	まほしき	まほしけれ

(形容詞に同じ)

口語にはたいといふ。

東京に行きたい。

練習一八

練習

一、左の文中より推量・打消指定・咏嘆・比況・希望の助動詞を指

- 摘し、且つ其の活用形をいへ。  
 (イ) 苟もこの國に生まれ、この國民たり、この國民の子孫たるもの、誰かこの光を仰がざるべき。  
 (ロ) かなはじとや思ひけむ、太刀を捨てて逃げ失せたり。  
 (ハ) 父は父たらずとも、子は子たらざるべからず。  
 (ニ) 冬の月は水晶もて作れるものを見るが如し。  
 (ホ) 寢覺の枕に通ひ來なり。あなゆかしの鐘の音や。  
 (ヘ) 旅行したきは山々なれども、父のゆるし給はぬを如何にかせん。  
 (ト) あはれ今年の秋もいぬあり。  
 (チ) 吉野山やがて出でじと思ふ身を花散りなばと人や待つらむ。  
 (リ) げに持つべきものは子なりけり。  
 (ヌ) 男のすなる日記といふものを女もして見んとてするなり。  
 (ル) 人の子たらんものは、重盛がその父に對するごとくあらまほしきものなり。

- (フ) 予は久しく求めて得なかつた故舊に邂逅したやうな、一種いふぬいはれぬ快感を以て彼等に注視した。  
 (ワ) 明日雨は降るだらう、併し風は吹くまい。  
 (カ) 「君は何か読んで見たいと思ふ書物はありますか。」かう問はれてすぐ書物の名の言へないのは耻辱とすべきだ。  
 二、左の助動詞の活用を示せ。  
 ず。 き。 む。 たり(時) けん。 さす。 如し。 たし。

第七章 助動詞と動詞との接續 (別表参照)

一 未然形につゞく助動詞

- (イ) 受身(可能) 崇敬 する 四段活用、ナラ 變格活用。  
 らる 上下、二段活用、カ、サ 變格活用。

東京に行かる。 父に死なる。

先生に褒めらる。よく勉強せらる。

(ロ) 使役(崇敬) **す** 四段活用ナラ變格活用  
**さす** 上下二、二段活用カサ變格活用  
**しむ** 全動詞

庭を掃かす。君側に侍らす

朝早く起きさす。早く來さす。

書を読ましむ。着物を着しむ。

(ハ) 現在完了ーリ 全動詞

運動せり。

(ニ) 未來ーむ 全動詞

雨降らむ。鞠を蹴む。

(ホ) 推量ーまし 全動詞

春の心は長閑からまし。

(ヘ) 打消 **じ** 全動詞

**ず** **ざり**

字を書かず。罪を受けじ。

勝つこと能はざりき。

(ト) 希望ーまほし 全動詞

花見に行かまほし。

許容事項

- (一) らるがサ行變格の動詞に結びつく場合に「罪サル」「解釋サル」  
と用ふるも妨げなし。
- (二) さすがサ行變格の動詞に結びつく場合に「手習サス」「周旋サス」  
「賣買サス」と用ふるも妨げなし。



口語 (三) 「得<sup>使役</sup>シム」といふ場合に「得<sup>使役</sup>セシム」と用ふるも妨げなし。  
ア、下ニ未然形

(イ) 崇敬—サ行變格の動詞に結びつく場合。

學校長は東京に出張せられた。

(ロ) 使役—せる || 四段活用。

させる || 四段活用以外の動詞

但、サ行變格活用に結びつく場合には「下女に掃除せさせる。」

と、やうに云ふべきなれども、サ行の語尾と助動詞「させる」の「た」と約りて「させる」となる。

下女に掃除させる。

(ハ) 未來—う || 四段活用。

よう || 四段活用以外の動詞。

(ニ) 打消—ない || 全動詞。

二 連用形につゞく助動詞

(イ) 現在完了  
 つぬたり || 全動詞

つぬたり

書きもらしつ。 日は暮れぬ。

全軍を率ゐたり。

(ロ) 過去  
 きけり || 全動詞

人は死にき。 花、散りけり。

(ハ) 但、**き**が**カ**サ變格活用の動詞につゞく場合に限り、左表の如き例外あり。

サ變	カ變	未然形	連用形
爲 <sup>セ</sup> しか	來 <sup>キ</sup> しか	來 <sup>キ</sup> しか	來 <sup>キ</sup> しか
爲 <sup>シ</sup> き	來 <sup>キ</sup> き		

(二) めはナ行變格の動詞につゞかず。  
許容事項

サ行四段活用の動詞を助動詞の「シシカ」に連ねて「暮しし時」過ししかば「などいふ場合を」暮せし時「過せしかば」などとするも妨げなし。

(ハ) 推量「けん」全動詞

いつの頃より興りけん。

(ニ) 希望「たし」全動詞

博覽會を見たし。いつ迄もここにありたし。

三 終止形につゞく助動詞

(イ)	推量	まじ	べし	らむ
		めり		
		らし		

|| 全動詞

靜心なく花の散るらむ。朝早く起くべし。

雨降るまじ。紅葉亂れて流るめり。

山の白雪積るらし。

(ロ) 可能「べかり」全動詞

一日に十里の道は行くべかりしに……………

(ハ) 咏嘆「なり」全動詞

汝と今や別るなり。

虫の聲すなり。

但右の助動詞がラ行變格活用とむすびつく場合にはその連體形よりす。

君側に侍るべし。有るらし。

四 (一) 連體形につゞく助動詞

(イ) 指定一なり 全動詞

夜は今明くるなり。  
但、なりは又體言の下にもつづく。

これは私の本なり。

指定のたりは用言の下にはつづくが、新くありたりして體言の下にのみつづく。されば用言の下のたりはすべて現在完了の助動詞なりと知るべし。

(ロ) 比況一如し 全動詞

但、助詞「が」を挟みて動詞・形容詞の連體形に添はること多し。

水の流るるが如し。

花の美しきが如し。

又、助詞「の」を挟みて名詞に添はることもあり。  
海の面鏡の如し。

五 已然形につづく助動詞

(イ) 現在完了ーリ 四段活用に限る

書を読み。 字を書けり。

第八章 助動詞相互の接續

助動詞は數個を併せ用ひて種々複雑なる意義をあらはすことを得。而して其の接續には各定まれる法則あり。即ち動詞の未然形に連るものは助動詞にも亦その未然形に連り、其他連用形・終止形等皆動詞に連る場合と異なることなし。

サ變未然形  
日夜奔走せ

使役未然形 受身連用形 時連用形 時終止形  
しめられたりき。  
未然形に連る助動詞(る助動詞) 連用形に連る助動詞(る助動詞) 連用形に連る助動詞(る助動詞)

○らんべしまじ等の如く、ラ行變格活用の動詞に限りてその連體形に連るものは、助動詞に於ても、ラ行變格活用に等しき助動詞には

練習一九

練習

又その連體形に連るものと知るべし。

彼は既に中學校を卒業せしなるべし。

(變ニ等シキ活用ノ連體形)

一次の文中の助動詞を指摘し、その接續法を述べよ。

- (イ) 淺草の鳩も淋しく思ふらん日ごと見なれしわれを見ぬため。
- (ロ) 玉松操は一の偉丈夫なりき。平生聲色を近づけず、酒肉を嗜まず、書を讀むを樂みとなし、夙に神武復古の説を抱きぬ。偶公に知られて、蟹居の一室を貸し與へられ、起居を俱にして畫策する所ありき。
- (ハ) 夏の初は青梅にぞ心地よきものなれ。青葉のしげれる枝に眞青の實の珠をなせる美しといふにはあらねど清々し。
- (ニ) 世の中にたえて櫻のなかりせば春の心はのどけからまし。
- (ホ) 遙に忘れたるこし方も今更思ひだされて消え入るばかりなり。
- (ヘ) 春の色いたり到らね里はあらじ咲ける咲かざる花の見ゆらむ。
- (ト) 秋きぬと目にはさやかに見えねども風のおとにぞおどろかれぬる。

(チ) 秋風に初雁がねぞ聞ゆなる誰が玉章をかけて來つらむ。

二次の文に誤あらば正し、且つその理由を説明せよ。

- (イ) 公園内に車を乗り入るヤベからず。
- (ロ) 今日先生の出せし問題は甚だ解し易かりし。
- (ハ) 吾は終夜眠らずして考へり。
- (ニ) 身體に害を及せしは過度に勉強せし故なり。
- (ホ) 再び耳を傾けれど寂として聲なかりき。
- (ヘ) 君は未だ東京を見まじ。
- (ト) その文章は余に讀まし給へ。
- (チ) 弓を射らんとするものは姿勢を正しふし、一本の矢をもあだにせじと思ひて心をゆるむるべからず。
- (リ) 齡長ける人は年少の者を勞るべし。
- (ヌ) 彼は本年も入學試験を受けり。

- (ル) 汝が考ふ如く容易に破られまじ。
- (ヲ) 車内に餘地ある時は出入口に御立ち下されまじく候。
- (ワ) 汝自ら爲し得ざることは、之を人に強ゆるべからず。
- (カ) 心を盡せしかどもつひに甲斐なかりき。
- (ヨ) 憐むべき老年を迎ふならん。
- (タ) 我等の渴望しし平和の曙光は漸く見えそめぬ。
- (レ) 市の中央に大砲を据へて頻に打出せしかば將軍勢に乗じて進みし。
- (ソ) かの友は既に死にぬ。
- (ツ) かゝる過は再びせまじ。
- (ネ) 第一軍をして正面の敵を攻撃させたり。
- (ナ) 目的を遂げやうと誓う。
- (ラ) もう一度ゆつくり考えて見やう。
- (ム) 僕が讀もう。
- (ウ) 聊か鄙見を述べやうと思ふ。

- 三、動詞の未然形連用形終止形につゞく助動詞を列舉せよ。
- 四、指定のなりと咏嘆のなりとが動詞に接續する時、その接續の異なりたる點をあげよ。
- 五、指定のたりと時のたりとが文中にある時、その接續上より見て、いかにこれを區別するか。
- 六、現在完了の「り」と動詞との接續法をのべよ。
- 七、過去の「き」「し」「しか」とカサ變格活用の動詞との接續法をのべよ。

第九章 助詞の用法

助詞には種々ありて、その用法も亦複雑なり。今その中にて誤謬を生じ易きものについて其の用法を説明せん。

ぞ

一 ぞなんこそ

舜何人ぞ。さる事は我は知らぬぞ。

右は文の終にぞを添へて強く指し示す意を表せり。ぞが活用語につく時は、その連體形を受く。

五月待つ花たちばなの香をかげば昔の人の袖の香ぞする。

奥山に紅葉ふみ分けなく鹿の聲きく時ぞ秋はかなしき。夕涼みよくぞ男に生れける。

右は文の中程にぞを添へたるものにて、かゝる場合には下は連體形を以て結ぶ定めなり。

かく緩かになん流るる。人と争はざるなん賢き。

なん

こそ

その人、貌よりは心なんまさりたる。

右のなんもぞと同じく強く指し示す意を有する助詞にて、下は連體形にて結ぶ定めなり。

物のあはれは秋こそまされ。

貌こそ美しけれ、心はむげに劣れり。

死なば一緒にこそともかくもならめ。

右のこそはぞなんよりも一層強く指し示す意を有する助詞にて、下は已然形にて結ぶ定めなり。

二 やか

かゝることありやなしや。

かゝることあるかなきか。

夜は静かに眠らるや。

か や

夜は靜かに眠らるるか。

霞か雲かはた雪か。

右は文の終にやかを添へて疑の意を表したるものにて、その活用語につく時はやは終止形をかは連體形を受くる定めなれども、今はやも連體形を受くること多し。(許容事項参照)

花や咲きし。誰かある。

右は文の中程にやかを添へて疑の意を表したるものにて、下は連體形にて結ぶ定めなり。

君は甲乙の中いづれを選ぶか。

五の三倍は幾何なるか。

右の如く上に疑の語ある時は、下にかを用ふる定めなれど、今はやを用ふることもあり。(許容事項参照)

反語

誰かその悲慘に涙を流さざるべき。

其の時悔ゆとも甲斐あらんや。

かくてやは果つべき。

水鶏のたゝくなど心細からぬかは。

右のやかは反語の意をあらはす。而してかゝる場合に感動の助詞はを伴ひてやはかはとして表るゝこと多し。

已に述べし如く文の中程にぞなんこそやかあれば、下は連體形又は已然形にて結ぶ定めなり。これを係結の法則といふ。但し口語にはこの法存せず。

係結

係語 結語

ぞなんやか……………連體形

こそ……………已然形

係結の法則は以上の如くなれども、若しその文が接續の用をなす助詞によりて下に續けらるゝ時は、その結びは表れずして、直に下文に接續す。

珍しき春もあすとぞキコユルきこゆれば接續助詞くれなむ年を何か惜しまむ。

淀川こそ洪水の害最もはげしきものなればナレ官廳の經營苦心を極めたり。

練習二〇

練習

- 一、次の文の係結につきて説明せよ。
- (イ) 一莖の草花にも人の工のえ企つまじき美しさぞこもれる。
- (ロ) 勉強に倦み給はん折は花なんこよなき慰めなる。
- (ハ) 自ら春風に坐すといひけん心地のみこそせられしか。

- (ニ) 重盛こそは正しく一門興隆の開山とも稱すべけれ。
  - (ホ) 偏に一身の安慰を未來に祈願せるこそ心得ね。
  - (ヘ) そびらにははやこときれし將校の亡骸をかきのせてこそ立てりけれ。
  - (ト) 花橋は名にこそ負へれ猶梅の匂にぞいにしへのことも立返り戀しう思ひ出でらるゝ。
  - (チ) 昨日こそ早苗とりしかいつのまに稻葉そよぎて秋風の吹く。
  - (リ) 春の夜の闇はあやなし梅の花色こそ見えね香やはかくるゝ。
- 二、次の文の係結に誤あらば正し、且つ其の理由を説明せよ。
- (イ) かの童ぞよく道を知ればつきて問はるべきし。  
一命をなむ擲ちて君の馬前に斃れぬる。
  - (ハ) その戸を開きてこそ見んと思ひけん。  
東寺の塔を松の間に墨がきなせる筆の力ぞ工なれ。
  - (ニ) 「貧家に生れたるぞ幸福なり」と古聖もいはれたる。
  - (ヘ) 世のならばしこそははかなきものなり。



ば

(ト) 音に聞えし此の壇の浦こそ源平二氏が最後の決戦を爲しし古蹟なり。

三 ばとどもども

明日雨降らば延期せむ。

明日天氣よくば旅行せむ。

今日雨降れば行かず。

水清ければ大魚棲まず。

右の如く**ば**が未然形に結びつく時は**假定**、已然形に結びつく時は**確定**の意味をあらはす。

口語にては左例の如く已然形にて假定確定兩様の意をあらはす。

明日雨降れば延ばさう。

水が清ければ魚が棲まない。

鳥の鳴かぬ日はありとも親を思はぬ日はあらし。

とも

ども  
ども

たとひ兵寡くともよもや敗るゝことはあらし。

花咲けども鶯未だ來鳴かず。

この品好ければ買はず。

右の如くとどもが動詞の終止形、形容詞の未然形に結びつく時は**假定**、とどもが動詞・形容詞の已然形に結びつく時は**確定**の意をあらはす。(助動詞との結びつき方は動詞・形容詞に準じて之を知るべし。)

現代文に於ては、誤解を生ぜざる限りに於て、**とども**の代りに**も**を用ふること許容せらる。(許容事項参照)

何等ノ事由アルモ(ア)リトモ(ア)リトモ議場ニ入ルコトヲ許サズ。

期限ハ今日ニ迫リタルモ(タ)レドモ準備ハ未ダ成ラズ。

口語―てもけれどても

鳥の鳴かない日はあつても……………  
品は好いけれども……………  
茶は飲んでも……………

四と

月と花と。 宗教と道徳との關係。  
京都と神戸と長崎とに行く。

事物を並列するときには、右の例の如くその一々の下にとを添ふる定めなれども、誤解を生ぜざる時に限り、最終の語句の下に之を省くも妨なし。(許容事項参照)

但左の如き場合には之を省くことを得ず。

史記と漢書との列傳を讀むべし。

史記と漢書の列傳とを讀むべし。

北條時宗、幼名を太郎といふ。

動作の標準を示すと

と  
並列のと

と  
上文を指示する

あの川を澱川と呼ぶ。  
右のとは動作の標準を示す。

月出づと見えて。

太平洋の夜は、今明けなんとす。

右のとは上文を指示す。

右の如くとが活用する語につく時は、終止形を受くべき定めなれども、現代文に於ては連體形を受くることもあり。(許容事項参照)

五だにすらさへ

七重八重花は咲けども山吹のみの一つだにさきぞかなしき。

鳥にだにしかず。

草木すら情あり。

だに

すら

さへ

行方すらも覺えず。

雨降り風さへ吹く。

涙をさへ落して喜びたり。

右の内だにすらは輕きをあげて重きを言外に思はしめ、さへはあるが上に更に添ひ加はる意の助詞なり。

口語にてはだにもすらもなく、さへが一般に用ひらる。

鳥にさへ及ばない。行方さへも分らぬ。

六 なな……そ

決して怠るな。ゆめ忘るな。危き場所に居るな。

右の如くなを動詞の終止形に添ふれば、その動作をすなと禁止する意を表す。但、ラ變の動詞に限りて、その連體形に添はる。

かくなのたまひそ。深くな咎めそ。

な

な……そ

吹く風をなこそその關と思へども道もせに散る山櫻かな。近く寄りて過なせそ。

な……そはなと同じく禁止の意をあらはす。而してこの場合にそは動詞の連用形を受く。但、カサ變格の動詞に限り、その未然形を受く。

七 ばやなむ

繪を巧に畫かばや。

さ月こば鳴きもふりなむ郭公まだしき程のこゑを聞かばや。

我が子、學者にならなむ。ことしより春知りそむる櫻花ちるといふ事はならはざらなむ。

ばや

なむ

右のばやなむは願望の意をあらはし、共に未然形につく。

注意 「鳴きもふりなむ」のなむの如く連用形につくものは現在完了のぬの未然形に未來のむの結びつきたるものなり。助詞のなむと混すべからず。

八 へ

學校に行く。 大阪に住む。  
前へ進む。 彼方へ向ふ。

右のには場所を示し、へは方向を示す。

口語にてはへにも同じやうに用ひらる。  
學校へ行く。 東京へ行く。

九 がにを

大いに努力せしが遂に效なかりき。

を に

日暮れたるに宿るべき家もなし。  
いそがずばぬれざらましを旅人のあとよりはる、野路の村雨。

右のがにをは語句を接續する助詞にして、活用する語の連體形に結びつく。

口語にてはがは文語と同じくにをはのに相當す。

一〇 てで

日くれて道遠し。

言はでやみぬ。 (ではすての變化したるものなり)

右のてでは語句を接續する助詞にして、ては連用形にては未然形に結びつく。

練習二

練習

一、左の文中における助詞を説明せよ。

- (イ) 勉強さへすればどんなことでも出来る。
- (ロ) 宜なるかな、世人東郷元帥を呼んで東洋のネルソンといふことや。
- (ハ) すべて月花をばさのみ目にて見るものかは。
- (ニ) 夢と知りせばさめざらましを。
- (ホ) げに聞くだに涙の種ぞかし。
- (ヘ) 君が代は千代に八千代にさゞれ石の巖となりて苔のむすまで。
- (ト) 良からぬ小説などな読み給ひそ。
- (チ) 我に對する爲にはあらで、先生を敬する爲にてありけるよ。
- (リ) 月を見れども楽しからず、鳥を聞けども嬉しからず。
- (ヌ) 今朝來鳴きいまだ旅なる時、鳥花橋に宿はからなむ。
- (ル) 波風の靜かなる日も舟人はかぢに心を許さざらなむ。

二、左の文に誤あらば正し、且つその理由を述べよ。

- (イ) 今のうちに勉めずむば、老ひて後に悔ふれども及ばざらむ。
  - (ロ) この陣地さへ落せば、他は憂ふるに足らず。
  - (ハ) 萬一失敗すれども決して落膽するべからず。
  - (ニ) 成績あしとも失望するに及ばず。
  - (ホ) 板垣死するとも自由は死せず。
  - (ヘ) 懇に戒めども馬耳東風と聞き流すのみ。
  - (ト) もし不都合の點あれば、指摘せらるべし。
  - (チ) もし御差支も候へば、御一報下されたく候。
  - (リ) 見事かの頭上の林檎を射落せば、汝が命を助けん。
  - (ヌ) 車へ乗りて行かむ。
  - (ル) 立錐の餘地さへなし。
  - (ヲ) 雪だに生憎に降りいでて、寒氣いよ／＼加はりぬ。
  - (カ) 敵衆しとも恐るるな。
- 石川や濱の眞砂は盡くるとも、世に盗人の種はつきまじ。

- (ヨ) 世人に譏らるが心憂しのみ。
- (タ) 暮るを待たで旅館に宿る。
- (レ) 志を遂げんと欲すれば須く努力すべし。
- (ツ) 彼もし兄の剛健なるに似れば、死して身後の名を成さん。
- (ネ) 終日業務を取扱はしむるといふ。

第十章 接頭語・接尾語

接頭語

一 接頭語

單獨にては用ひられず、ある他の語の上につきて、其の語と熟語をなすものを接頭語といふ。

さ夜、を川、み山、はつ春、うひ陣、第二番、た走る、ほの見ゆ、か弱し、け高し、生やさし、もの寂し。

接頭語には意味を添ふるものと、然らざるものとあり。而して接頭語の添りてなれる熟語はもとの語と品詞を同じうす。

うち見る、さし招く、ひき受く。

右のうちさしひきはもと動詞なれども、その本の意を失ひて、接頭語となりたるなり。

二 接尾語

單獨にては用ひられず、ある他の語の下につきて、其の語と熟語をなすものを接尾語といふ。

友どち、奴ばら、君がた、壹圓、三號、二つづつ、厚み、黒さ、悲しげ、春めく、黄ばむ、男らし、夜すがら。

接尾語はいづれも或意味を添ふるものなり。而して接尾語の添りてなれる熟語は、接尾語の性質によりて品詞を異にす。

接尾語

轉成の名詞

第十一章 品詞の轉成

一 轉成の名詞

- (イ) 動詞の連用形より || 光。霞。氷。謠。
- (ロ) 動詞の終止形より || 茂シヅカ。薰カスミ。勝ユツル以上人名。かげろふ。  
すまふ。
- (ハ) 形容詞の語根に接尾語みさを添ふ。厚み。重さ。
- (ニ) 形容詞の終止形より || あかし(燈)。すし(鮓)。からし(芥子)。
- (ホ) 形容詞の語根より || 白。黒。赤。

轉成の代名詞

二 轉成の代名詞

- (イ) 名詞より || 君。僕。小生。殿。臣。

轉成の副詞

三 轉成の副詞

- (イ) 名詞より。  
今日雨降る。明日御歸りになりますか。
- (ロ) 動詞の連用形より。  
たとひ雨が降るとも……。  
それはあまりひどいことです。
- (ハ) 形容詞の連用形より。  
水能く流る。花少しく開く。
- (ニ) 形容詞の語根に接尾語げを添ふ。  
悲しげに泣く。いと惜しげに見ゆ。

轉成の接續詞

四 轉成の接續詞

- (イ) 動詞より。

土曜日及び日曜日は休業す。

(ロ) 副詞より。

山また山を越ゆ。

練習三三

練習

一、左の文章中より接頭語と接尾語とを摘出せよ。

(イ) さ夜ふけてほの暗き御あかしの影ものさびし。

(ロ) 御刀の汚れにて候。雑卒ばらの手にかゝり給はば末代までの御恥辱にて候。

(ハ) 春來れば雪消の澤に袖垂れてまだうら若き若葉をぞ摘む。

(ニ) 秋らしくなりていと露けし。

(ホ) 同じ自然の御母の御手に育ちし姉と妹み空の花を星といひわが世の星を花といふ。

(ヘ) 色々御世話になりました。この御恩は決して忘れませぬ。

二、形容詞の轉じて副詞となれるもの五六をあげよ。

三、左の名詞の構成を説明せよ。

たうゑ(田植)。よろこび。楽しみ。読み書き。憂。末廣。振舞。



### 文章篇

#### 第一章 文の成分

##### 主語・述語

##### 主語述語

- 一 犬 走る。
- 鳥 飛ぶ。
- 魚が 躍る。(口)
- 二 山 高し。
- 水 清し。
- 大軍 雲霞の如し。
- 花が 美しい。(口)
- 三成は 忠臣なり。

犬は。動物だ。(口)

##### 文の主成分

右の例の(一)は「何がどうする」。(二)は「何がどんなだ」。(三)は「何が何だ」といふ形式の文なり。而して「何が」に當るもの、即ち文の題目を表す語を主語といひ、どうする「どんなだ」「何だ」に當るもの、即ち敘述を表す語を述語といふ。

主語と述語とは如何なる文にも缺くべからざるものなれば、これを特に文の主成分といふ。

- 一 鳥 鳴く。
- 風 涼し。
- 二 われも 歸る。
- 空は 青し。

右の例の如く、主語は體言が單獨に表るゝ場合と、下に助詞の添

はりて表るゝ場合とあり。

死ぬるは 悲し。

赤きが よし。

右の例の如く、主語は又體言に準ずべき語よりなることあり。

一 白雲 飛ぶ。

二 月 清し。

三 夜も 明けたり。

四 花 咲きぬ。

五 旅行は 樂しかりしか。

右の例の如く、述語は用言よりなり、更にこれに助動詞助詞の添はりて表るゝものなり。

一 尊氏は 逆臣なり。

君 君たり。

怒濤 山の如し。

二 花の 散るなり。

水の 清きなり。

歲月 流るゝ(が)如し。

右の例の如く、述語は又體言若しくは用言の下に、指定の助動詞なりたり、比況の助動詞如し等の連りたる語より成ることあり。

修飾語

一 赤き花 咲く。

二 風 烈しく吹く。

山 甚だ高し。

右の例に於て、形容詞赤きは花を修飾し、副詞烈しくは吹くを、副

修飾語

詞甚だは高しを修飾す。かくの如く文中にありて他の語を修飾する語を修飾語といふ。而して赤きの如く體言を修飾するを形容詞的修飾語といひ、烈しく甚だの如く用言を修飾するを副詞的修飾語といふ。

形容詞的修飾語

我が庭に 美しき朝顔 咲けり。  
静かなること 林の如し。  
長閑な光が 油のやうな海面に融けてゐる。(口)  
進歩主義は 有爲なる國民の忘るべからざる要訣なり。  
渦巻く波に とび込んだ。(口)  
寒からぬ雪は 雲なき空よりこぼれて顔を撲つ。

右の如く形容詞的修飾語は形容詞の連體形若しくはこれに準

ずる語なり。

副詞的修飾語

副詞的修飾語

食指 おのづから 動く  
太閤は 平常 鶴を 愛せられたり。  
鐵道 不通に なること 往々にして あり。  
津々として 詩趣を 生ず。  
一切の物音は はたと 絶えた。(口)  
今朝 東京へ向けて 出發した。(口)  
午後一時より 講演會を開く。  
あちらへ行け。  
今度はやめます。(今度は主語にあらず注意すべし。)(口)  
春はくれども 花 咲かず。

右の如く副詞的修飾語は副詞若しくは副詞に準ずる語なり。

猫 鼠を 捕ふ。

太郎は 級長と なつた。(口)

面は 猿に 似たり。

二の三倍は 六に 等し。

父 家を 子に 譲る。

次の一隊は 大山中尉に 引牽せられて 川を 渡れり。

犬 人に 打たる。

上文傍線を施せる語は、それ〴〵に用言を修飾す。かく體言に助詞をにの結合せるものを特に客語といふ。

獨立語

一 彼等は支那及び南洋を視察せり。

客語

獨立語

接續の語

同格の語

生徒は數學を學び、次いで英語を學びたり。

二 執權義時は弟時房と長男泰時とを都に遣したり。

爾臣民父母に孝に、兄弟に友に。

三 太郎やおまへもう學校に行かないかえ。(口)

あれ見給へ、箱王殿。空をとぶ翼も皆別の翼をぞまじへざりける。

四 やあ、いかにあれなるは佐野源左衛門の尉常世か。

あゝ、花が咲いた。(口)

五 太郎は、性、理學に長ず。

大日本帝國は、萬世一系の天皇之を統治す。

右の例の及び次いで(接續の語)、執權弟長男爾(同格の語)、太郎や箱王殿(呼掛の語)、やあ、いかにあゝ(感動の語)、太郎は、大日本帝國は(提

提示の語

感動の語

呼掛の語

示の語は、文の成立には關係なきものなり。かくの如き語を獨立語といふ。

練習二二

練習

左の文中より、主語述語修飾語獨立語を摘出し、猶修飾語はそのいづれの語を修飾せるかを説明せよ。

- (イ) 中江藤樹先生は俗稱を與右衛門といふ。
- (ロ) ねむさうな雞の聲のする村もすぎけたましく犬の吠えかゝる村も過ぎた。
- (ハ) 天下の事つとめてやますんば、遅くとも一たびは成就すべし。
- (ニ) 神殿を組織する一本の柱にも、悉く皆國民の燃えるやうな熱誠が籠つて居る。
- (ホ) 健全なる精神は健全なる身體に宿る。
- (ヘ) 西山の花見る人は、多く御室を指す。

- (ト) 正確なる知識は鋭利なる機械の如し。
- (チ) 兎は前足が短い。
- リ) 帝國議會は毎年之を召集す。
- (ヌ) 拍手急霰に似たり。
- (ル) 誦經の聲遠く響きて、鶯の歌とこしなへに高き梢にあり。
- (ヲ) 彼は、性質極めて温順なり。
- (ワ) いかにも母御前父はいづくにおはしますぞや。
- (カ) 鐘が鳴つた。それでも授業は始まらない。
- (ヨ) あゝ、わが運命もこれにて定まれるか。
- (タ) 少納言よ、香爐峯の雪はいかならん。
- (レ) 不忍の池詩人、これを小西湖といふ。
- (ツ) 象は體大なり。
- (ヅ) 我が少年諸子よ、諸子は曾て死を考へしことありや。

第二章 文の成分の位置と省略

正序法

- (一)主―述
- (二)主―客―述

一 正序法

- 一 庭主ノ修の朝顔主美しく咲述ノ修けり。
- 二 隣家主ノ修の猫主大きな鼠客ノ修を巧述ノ修に捕述へたり。

右の文の成分の位置の普通なるものなり。これを正序法といふ。而して主語は述語の前、修飾語は被修飾語の上に來るを常とす。

倒序法

二 倒序法

- 一 美述なるかな山河主のかため。
- 二 たれ述で述すか、君主は。
- 三 雲述のい述づこ修に月主やど述るらむ。
- 四 僕客の本主をだれ主が持述つていつたらう。

省略法

三 省略法

右は文の語調を調べ、或は語勢を強めんがために、文の成分の位置を替へたるものなり。これを倒序法といふ。

- 一 人を相手にせず、天を相手にせよ。
  - 二 この處に塵芥捨つべからず。
  - 三 福は内、鬼は外。
  - 四 彼は末頼しき少年にこそ。
  - 五 神よ、願はくは助け給へ。
  - 六 皇は。一本御書所に。内侍所は。温明殿に。劔璽はいづこに。夜の大殿に。
- 右の(一)(二)は主語、(三)(四)は述語、(五)は客語、(六)は種々の成分の省略せ

られたるものなり。かくの如く文はまた冗長を避け、文意を強めんがために、其の成分を省略することあり。これを省略法といふ。

練習二四

練習

左の文中にある倒序法、省略法について説明せよ。

- (イ) 油断大敵。
- (ロ) 祝へ諸人もろともに。
- (ハ) 人の噂も七十五日。
- (ニ) 人は誹るとも、我は咎めず。
- (ホ) 千里の道も足もとより。
- (ヘ) とまれ蝶々、さく花に。
- (ト) 牛馬繫ぐべからず。
- (チ) われに惜むな家づとの一枝の筆の花の色香を。

句

句

- (リ) 道路の左側を通行すべし。
- (ヌ) 春來ぬと人はいへどもうぐひすの鳴かぬ限はあらじとぞ思ふ。
- (ル) 愉快だつたね、ほんたうに昨日の遠足は。
- (ヲ) たれかあはれと聞かざらん、あはれ血に泣くその聲を。
- (ワ) 降る雪にきこりの道もうもれけり。

第三章 句及び節

- 一 香の高きは梅の花なり。
- 二 かしこに松の生ひ茂れる岡あり。
- 三 水清ければ大魚棲まず。

右の例の傍線を引ける部分は、いづれも文がその獨立を失ひて

名詞句

他の文の一成分となれるものなり。これを句といふ。句には名詞句・形容詞句・副詞句の三種あり。

一 名詞句 名詞の用をなすもの。

一 香の高きは梅の花なり。 | (主語)

二 われは時のうつるを知らざりき。 | (客語)

形容詞句

二 形容詞句 形容詞の用をなすもの。

一 雨の降る夜はもの寂し。

二 瀑の落つる音は百雷の轟く響に似たり。

副詞句

三 副詞句 副詞の用をなすもの。

一 水清ければ大魚棲まず。

二 天氣晴朗なれども波高し。

節

節

一 東寺の塔はわれを迎へて立つ。

二 鴨川の水はわれを迎へて歌ふ。

右は何れも一つの文なり。今これを重ねて、

東寺の塔はわれを迎へて立ち、鴨川の水はわれを迎へて

歌ふ。

といへば、又一つの文となる。この場合に於て傍線の部分は各對立したるものにて、一方が他の一方の成分にあらず。この各の部分を節といふ。

練習二五

練習

一 左の文中の句と節とをあげ、且つ句につきてはその何句なるかを答へよ。

(イ) 味のよき魚は波の荒き海に住む。



- (ロ) 能ある鷹は爪をかくす。
- (ハ) 無理が通れば道理が引込む。
- (ニ) 水は方圓の器に従ひ、人は善惡の友による。
- (ホ) 腦の良いのは一生の徳だ。
- (ヘ) 残暑凌ぎ難けれど、樹間叢裡已に秋の聲あり。
- (ト) 自分は身中に健康の充溢れるのを覺えた。
- (チ) 夏の夜はまだ宵ながら明けぬるを、雲のいづこに月やどるらむ。
- (リ) 月明かに星稀なり。
- (ヌ) 前車の覆るは、後車の戒なり。
- (ル) 花咲く春はいと樂し。

二、句と節との區別を述べよ。

三、例をあげて句の種類を説明せよ。

構造上の種類

平叙文

單文

複文

第四章 文の構造上の種類

文は構造上より、左の三種に分類することあり。

一 單文

- 一 鳥啼く。
- 二 われ花を嵐山に觀る。

右は主語と述語との關係唯一回成立せる文にして、かゝる文を單文といふ。

二 複文

- 一 春は來れども、鶯鳴かず。
- 二 景色の麗しきは、天橋立なり。
- 三 景色の麗しき天橋立は、丹後國にあり。

重文

右は一つ以上の句を含み、主語と述語との關係の二回以上成立せる文にして、かゝる文を複文といふ。

三重文

一 花咲き 鳥啼く。

二 病は口より入り、禍は口より出づ。

右の如く二つ以上の節より成る文を重文といふ。

性質上の種類

第五章 文の性質上の種類

文は性質上より左の四種に分類することを得。

平敘文

一 平敘文

一 雨降り風吹く。

二 猛虎一聲山月高し。

疑問文

二 疑問文

一 わが艦の敵に降れるものなきか。

二 雲の何處に月宿るらむ。

三 誰か最も賢き。

四 精神一到何事か成らざらむ。

右の例の如く、疑問の意をあらはすもの、或は反語の意をあらはす文を疑問文といふ。

命令文

三 命令文

一 よく學びよく遊べ。

命令文

- 二 早く着物を着よ。
  - 三 明日午前八時出頭すべし。
  - 四 無用のもの入るべからず。
  - 五 主なしとて春な忘れそ。
- 右の例の如く、命令禁止の意を表す文を命令文といふ。命令文には主語の省略せらるゝを常とす。

感動文

- 四 感動文
    - 一 あはれ、この幾ひらこそまたも得難き形見なれや。
    - 二 忠なるかな、楠氏。
    - 三 あゝ、はな／＼しくも果敢なかりし君が一生かな。
    - 四 もうそんなに成るのかなあ、卒業してから。
- 右の例の如く、感動の意を表す文を感動文といふ。感動文には

主成分の完備せざること多く、又成分の倒置せらるゝこと極めて多し。  
 右に説けるが如く、成分の倒置・省略は文の性質に關すること大なるものあり。

練習二六

練習

一次の文は構造上及び性質上如何なる種類に屬するか。

- (イ) 春は花をめで、秋は紅葉をあはれむ。
- (ロ) あはれ今年も秋も往ぬめり。
- (ハ) 昨日は東に走り、今日は西に走る。
- (ニ) 炊煙の空高く上るも見ゆれば、人家は近かるべし。
- (ホ) 明日天氣よくば、旅行し給ふか。
- (ヘ) 芭蕉の廣葉に夕風の渡るを聞く。
- (ト) 枯枝に鳥のとまりけり、秋の暮。

- (チ) 一旦事あらば吾人は身命を捧げて國家を防護すべし。
- (リ) 英國は各自がその本分を盡さんことを期待す。
- (ヌ) 勝つことばかり知りて負けることを知らざれば禍その身に至る。
- (ル) 夏山になくほととぎす心あらば物おもふわれに聲な聞かせそ。
- (ヲ) 秋は夜おもしろく夜は月おもしろし。
- (ワ) 年豊かなれば詣り謝し天早すれば雨を乞ふ。
- (カ) 堪忍は無事長久の基。
- (ヨ) 怒は敵と思へ。
- (タ) 家陋なりといへども膝を容るべく庭狭しといへども碧空を望むべし。
- (レ) 湊川は楠木正成の戦死せし所なり。
- (ソ) 人も學びて後にこそ誠の徳はあらはるれ。
- (ツ) 無理が通れば道理が引込む。
- (ネ) 義は金銭よりも堅く死は鴻毛よりも輕し。
- (ナ) 月霜の如く地に冴え風海の如く空に吼ゆ。

六 (ラ) 用があつたら手を鳴らします。

訂五 中等新國文典終

### 附錄 文法上許容ニ關スル事項

- 一 「居リ」「恨ム」「死ヌ」ヲ四段活用ノ動詞トシテ用キルモ妨ナシ。
- 二 「シク・シ・シキ」活用ノ終止言ヲ「アシシ」「イサマシシ」ナド用キル習慣アルモノハ之ニ從フモ妨ナシ。
- 三 過去ノ助動詞ノ「キ」ノ連體言ノ「シ」ヲ終止言ニ用キルモ妨ナシ。  
例 火災ハ二時間ノ長キニ互リテ鎮火セザリシ。  
金融ノ靜謐ナリシ割合ニハ金利ノ引弛ヲ見ザリシ。
- 四 「コトナリ」「異ヲコトナレリ」「コトナリテ」「コトナリタリ」ト用キルモ妨ナシ。
- 五 「、セサス」トイフベキ場合ニ「セ」ヲ略スル習慣アルモノハ之ニ從フモ妨ナシ。  
例 手習サス。  
周旋サス。  
賣買サス。
- 六 「、セラル」トイフベキ場合ニ「、サル」ト用キル習慣アルモノハ之ニ從フモ妨

ナシ

例 罪サル。

評サル。

解釋サル。

七 「得シム」トイフベキ場合ニ「得セシム」ト用キルモ妨ナシ。

例 最優等者ニノミ褒賞ヲ得セシム。

上下貴賤ノ別ナク各其地位ニ安ズルコトヲ得セシムベシ。

八 佐行四段活用ノ動詞ヲ助動詞ノ「シ・シカ」ニ連ネテ「暮シシ時」「過シシカバ」ナドイ

フベキ場合ヲ「暮セシ時」「過セシカバ」ナドトスルモ妨ナシ。

例 唯一遍ノ通告ヲ爲セシニ止マレリ。

攻撃開始ヨリ陷落マデ僅ニ五箇月ヲ費セシノミ。

てにをばノ「ハ」動詞助動詞ノ連體言ヲ受ケテ名詞ニ連續スルモ妨ナシ。

例 花ヲ見ルノ記。

學齡兒童ヲ就學セシムルノ義務ヲ負フ。

市町村會ノ議決ニ依ルノ限リニアラズ。

一〇 疑ノてにをはノ「ヤ」ハ動詞形容詞助動詞ノ連體言ニ連續スルモ妨ナシ。

例 有ルヤ。

面白キヤ。

父ニ似タルヤ母ニ似タルヤ。

一一 てにをはノ「トモ」ノ動詞使役ノ助動詞及受身ノ助動詞ノ連體言ニ連續スル習  
慣アルモノハ之ニ從フモ妨ナシ。

例 數百年ヲ經ルトモ。

如何ニ批評セラル、トモ。

強ヒテ之ヲ遵奉セシムルトモ。

一二 てにをはノ「ト」ノ動詞使役ノ助動詞受身ノ助動詞及時ノ助動詞ノ連體言ニ連  
續スル習慣アルモノハ之ニ從フモ妨ナシ。

例 月出ヅルト見エテ。

嘲弄セラル、ト思ヒテ。

終日業務ヲ取扱ハシムルトイフ。

萬人皆其德ヲ稱ヘケルトゾ。

一三 語句ヲ列舉スル場合ニ用キルてにをはノ「ト」ハ誤解ヲ生ゼザルトキニ限リ最  
終ノ語句ノ下ニ之ヲ省クモ妨ナシ。

例 月ト花。

宗教ト道德ノ關係。

京都ト神戸ト長崎ヘ行ク。

最終ノ「ト」ヲ省クトキハ誤解生ズベキ例。

史記ト漢書トノ列傳ヲ讀ムベシ。

史記ト漢書ノ列傳トヲ讀ムベシ。

一四 上ニ疑ノ語アルトキニ下ニ疑ノてにをはノ「ヤ」ヲ置クモ妨ナシ。

例 誰ニヤ問ハン。

幾何ナルヤ。

如何ナル故ニヤ。

如何ニスベキヤ。

一五 てにをはノ「モ」ハ誤解ヲ生ゼザル限リニ於テ「トモ」或ハ「ドモ」ノ如ク用キルモ妨ナシ。

例 何等ノ事由アルモ(アリトモ)議場ニ入ルコトヲ許サズ。

期限ハ今日ニ迫リタルモ(タレドモ)準備ハ未ダ成ラズ。

經過ハ頗ル良好ナリシモ(シカドモ)昨日ヨリ聊カ疲勞ノ狀アリ。

誤解ヲ生ズベキ例。

請願書ハ會議ニ付スルモ(ストモ)之ヲ朗讀セズ。

給金ハ低キモ(ケレドモ)應募者ハ多カルベシ。

一六 「トイフ」「トイフ語ノ代リニ」ナル「ヲ用キル習慣アル場合ハ之ニ從フモ妨ナシ。

例 イハユル哺乳獸ナルモノ。

顔回ナルモノアリ。

理由書

國語文法トシテ今日ノ教育社會ニ承諾セラルルモノハ德川時代國學者ノ研究ニ基キ、専ラ、中古語ノ法則ニ準據シタルモノナリ。然レドモ、之ノミ依リテ、今日ノ普通文ヲ律センハ、言語變遷ノ理法ヲ輕視スルノ嫌アルノミナラズ、コレマデ、破格、又ハ、誤謬トシテ斥ケラレタルモノト雖モ、中古語中ニ其用例ヲ認メ得ベキモノ尠シトセズ。故ニ文部省ニ於テハ、從來、破格、又ハ、誤謬ト稱セラレタルモノノ中、慣用最モ弘キモノ數件ヲ舉ゲ、之ヲ許容シテ、在來ノ文法ト並行セシメンコトヲ期シ、其許容如何ヲ國語調査委員會ニ諮問セシニ同會ハ審議ノ末許容ヲ可トスルニ決セリ。依テ、自今文部省ニ於テハ教科書檢定、又ハ編纂ノ場合ニ之ヲ應用セントス。

(明治三十八年十二月二日 文部省告示第百五十八號)

表用活詞動語

カ行 變格	下 一 段		上 一 段		有	四 段
	(蹴)	兼	(着)	起		
(來)	コ	ケ	ネ	キ	キ	ラ
	キ	ケ	ネ	キ	キ	リ
	クル	ケル	ネル	キル	キル	ル
	クル	ケル	ネル	キル	キル	ル
	クレ	ケレ	ネレ	キレ	キレ	レ
七ヨ	コイ	ケヨ	ネヨ	キヨ	キヨ	レ

野山書

一、...  
 二、...  
 三、...  
 四、...  
 五、...  
 六、...  
 七、...  
 八、...  
 九、...  
 十、...



[表 一 第]

表用活詞動語口

サ行 變格	カ行 變格	下 一 段		上 一 段		四 段			種 類	活 用 の 語 根	活 用 形
		(爲)	(來)	(蹴)	兼	(着)	起	有			
シセ	コ	ケ	ネ	キ	キ	ラ	ナ	カ	未然		
シ	キ	ケ	ネ	キ	キ	リ	ニ	キ	連用		
スル	クル	ケル	ネル	キル	キル	ル	ヌ	ク	終止		
スル	クル	ケル	ネル	キル	キル	ル	ヌ	ク	連體		
スレ	クレ	ケレ	ネレ	キレ	キレ	レ	ネ	ケ	已然		
シ ロヨ	コ イ	ケ ヨ	ネ ヨ	キ ヨ	キ ヨ	レ	ネ	ケ	命令		

表用活詞動語文

ラ行 變格	ナ行 變格	サ行 變格	カ行 變格	下 一 段	下 二 段	上 一 段	上 二 段	四 段	種 類	活 用 の 語 根	活 用 形
ラ	ナ	セ	コ	ケ	ネ	キ	キ	カ	未然		
リ	ニ	シ	キ	ケ	ネ	キ	キ	キ	連用		
リ	ヌ	ス	ク	ケル	ヌ	キル	ク	ク	終止		
ル	ヌル	スル	クル	ケル	ヌル	キル	クル	ク	連體		
レ	ヌレ	スレ	クレ	ケレ	ヌレ	キレ	クレ	ケ	已然		
レ	ネ	セヨ	コヨ	ケヨ	ネヨ	キヨ	キヨ	ケ	命令		

[表二第]

用活詞容形語口				用活詞容形語文			
シク活用	ク活用	種類	活用の	シク活用	ク活用	種類	活用の
涼	清	語根		涼	清	語根	
シク	ク	未然	活	シク	ク	未然	活
シク(ウ)	ク(ウ)	連用		シク	ク	連用	
シイ	イ	終止	用	シ	シ	終止	用
シイ	イ	連體		シ	キ	連體	
シケレ	ケレ	已然	形	シケレ	ケレ	已然	形

[表一第]

表用活詞動語口											表用活詞動語文										
サ行變格	カ行變格	下一段		上一段		四段			種類	活用の	ラ行變格	ナ行變格	サ行變格	カ行變格	下一段	下二段	上一段	上二段	四段	種類	活用の
(爲)	(來)	(蹴)	兼	(着)	起	有	死	書	語根		有	死	(爲)	(來)	(蹴)	兼	(着)	起	書	語根	
シセ	コ	ケ	ネ	キ	キ	ラ	ナ	カ	未然	活	ラ	ナ	セ	コ	ケ	ネ	キ	キ	カ	未然	活
シ	キ	ケ	ネ	キ	キ	リ	ニ	キ	連用		リ	ニ	シ	キ	ケ	ネ	キ	キ	キ	キ	
スル	クル	ケル	ネル	キル	キル	ル	ヌ	ク	終止	用	リ	ヌ	ス	ク	ケル	ヌ	キル	ク	ク	終止	用
スル	クル	ケル	ネル	キル	キル	ル	ヌ	ク	連體		ル	ヌル	スル	クル	ケル	ヌル	キル	クル	ク	ク	
スレ	クレ	ケレ	ネレ	キレ	キレ	レ	ネ	ケ	已然	形	レ	ヌレ	スレ	クレ	ケレ	ヌレ	キレ	クレ	ケ	已然	形
シセヨ	コイ	ケヨ	ネヨ	キヨ	キヨ	レ	ネ	ケ	命令		レ	ネ	セヨ	コヨ	ケヨ	ネヨ	キヨ	キヨ	ケ	ケ	

四表

四表

否定		希望	比況	
じ	ず	たし	ごとし	まじ
し	ず	く	く	
し	ず	く	く	
じ	ず	し	し	○
じ	ぬ	き	き	
じ	ね	けれ	し	
し	し	し	し	
キ		用活詞		

[表 三 第]

表 用 活 詞 動 助 語 文

推 量	時		否 定		希 望	比 況	推 量			否 定	指 定		時			崇 敬	使 役	崇 敬	受 身	の 種 類	助 動 詞
	け む	む き	じ す	た し	こ と し	ま じ	ら し	べ し	べ か り	ざ り	な り	た り	け り	た り	り ぬ つ	し む	さ す	す	ら る	語	
				す	く	く	く	ら	ら	ら	ら	ら	な	て	め	せ	れ	未然	活 用		
				す	く	く	く	り	り	り	り	り	に	て	め	せ	れ	連用			
む	む	き	じ す	し	し	○	○	し	り	り	り	り	ぬ	つ	む	す	る	終止			
む	む	し	じ ぬ	き	き		き		る	る	る	ぬ	つ	む	する	る	連體				
め	め	しか	じ ね	けれ			けれ		れ	れ	れ	ぬ	つ	む	すれ	る	已然	形			
									れ	れ			ね	て よ	め よ	せ よ	れ よ		命令		
用 活 種 特				用 活 詞 容 形				用 活 格 變 行 ラ				ナ 變	用 活 段 二 下								

[表 四 第]

表用活詞動助語口

推 量	時		指 定	時	希 望	推 量	否 定	使 役	崇 敬	可 能	受 身	の 種 類	助 動 詞
	ま	い											
ま	よ	う	だ	た	た	ら	な	さ	せ	ら	れ	語	用
い	う	う	だ	た	た	ら	な	さ	せ	ら	れ		
			だ	た				せ	れ	未	然		
			だ		く			せ	れ	連	用		
ま	う		だ	た	い			せ	る	終	止		
				た	い			せ	る	連	體		
				た	け	れ		せ	れ	已	然		
								せ	ろ	命	令		
用 活 種 特				用活詞容形				用 活 段 一 下					

[表 三 第]

表用活詞動助語文

推 量	時		否 定	希 望	比 況	推 量	否 定	指 定	時				崇 敬								
	ら	け							む	き	じ	す		た	ご	ま	ら	べ	べ	ざ	な
ら	け	む	き	じ	す	た	ご	ま	ら	べ	べ	ざ	な	た	け	た	り	ぬ	つ	し	さ
む	む				す	く	く		く	ら	ら	ら			ら	な	て	め	せ		
					す	く	く		く	り	り	り			り	に	て	め	せ		
む	む	き	じ	す	し	し	〇	〇	し	り	り	り			り	ぬ	つ	む	す		
む	む	し	じ	ぬ	き	き		る	る		る	る			る	ぬ	つ	む	す		
め	め	し	か	じ	ね	け	れ		け	れ	れ	れ			れ	ぬ	つ	む	す		
									れ	れ					ね	て	よ	め	よ		
用 活 種 特				用活詞容形				用 活 格 變 行 ラ				ナ	變	用 活 段							

[表 六 第]

法續接のと詞容形詞動と詞助續接

詞 容 形	詞 動	
と ば も	で ば	未然形
	つ つ て	連用形
	と と	終止形
に を が	に を が (と も) (と)	連體形
ど ど ば も	ど ど ば も	已然形

●括弧内のは今文にのみ用ひらるゝもの。

[表 五 第]

法續接詞動助詞動

り <small>(サ變に 限る)</small>	まほし	じ	ざり	す	まし	む	しむ	さす <small>(上、下、二、 サ變格活 用に限る)</small>	す <small>(四段子、ラ變 格活用に限る)</small>	らる <small>(上、下、一、 二、サ變格、 カ、カ、 用に限る)</small>	る <small>(四段子、ラ變 格活用に限る)</small>	未然形に
					たし	けむ	けり	き <small>(カ、サ變格活 用に限る、 例外あり)</small>	たり(時)	ぬ	つ	連用形に
					なり(咏嘆)	まじ	めり	らし	べかり	べし	らむ	終止形に
										ごとし	なり	連體形に
											り <small>(四段 活 に 限 る)</small>	已然形に

同容形詞動と詞助續接

詞	動		
	で	ば	未然形
	つつ	て	連用形
	とも	と	終止形
に	を	が	連體形
	ども	ど	已然形

なりは體言  
にもつゞく。  
如しは助詞。  
の、は、こ、あ  
り、づ、く、こ、あ

ラ變に限つ  
づ連體形に

[表 六 第]

法續接のと詞容形詞動と詞助續接

詞 容 形	詞 動	
とも ば	で ば	未然形
	つつ	連用形
	とも と	終止形
に を が	に を が (とも) (と)	連體形
ども ど ば	ども ど ば	已然形

●括弧内のものは今文にのみ用ひらるゝもの。

[表 五 第]

法續接詞動助詞動

り (サ變に 限る)	まほし	じ	ざり	す	まし	む	しむ	さす (上、下、二、 サ變格活 用に限る)	す (四段子ラ變 格活用に限る)	らる (上、下、二、 サ變格活 用に限る)	る (四段子ラ變 格活用に限る)	未然形に
					たし	けむ	けり	き (カ、サ變格活 用に限る)	たり(時)	ぬ	つ	連用形に
					なり(咏嘆)	まじ	めり	らし	べかり	べし	らむ	終止形に
										ごとし	なり	連體形に
											り (四段活 用に限る)	已然形に

ラ變に限る  
づ連體形につ

なりは體言  
にもついで  
如しは助詞  
の、こにあ  
づ、こにあ



昭和四年八月二十八日印  
 昭和四年八月三十一日發  
 昭和四年十二月二十一日訂正再版印刷  
 昭和四年十二月二十四日訂正再版發行

訂五 中等新國文典

定價	昭和四年臨時定價
金參拾九錢	金六拾四錢

著者 京都市外修學院 吉澤義則

發印者 東京市神田區表神保町二番地 鈴木政雄

發行者 大阪市東區博勞町五丁目五十六番地 鈴木常松



發行所

東京市神田區表神保町二番地  
 振替口座(東京二六四四番)  
 大阪市東區博勞町五丁目五十六番地  
 振替口座(大阪四七一一番)

東京修文館  
 大阪修文館

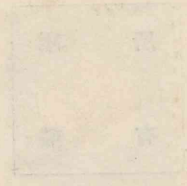


廣島縣立原實業學校

發行所

大隈通文館  
東京  
大隈通文館  
東京  
大隈通文館  
東京

大隈通文館  
東京  
大隈通文館  
東京  
大隈通文館  
東京



東京  
大隈通文館  
東京  
大隈通文館  
東京  
大隈通文館  
東京

大隈通文館  
東京  
大隈通文館  
東京  
大隈通文館  
東京

東京	大隈通文館
東京	大隈通文館
東京	大隈通文館
東京	大隈通文館
東京	大隈通文館

東京  
修文館  
藏版

広島大学図書

2000048273



文庫

30

273